

岩手県総合計画審議会  
令和4年度第3回県民の幸福感に関する分析部会

(開催日時) 令和4年6月23日(木) 9:00~12:00

(開催場所) エスポワールいわて 3階 特別ホール

- 1 開 会
- 2 議 題
  - (1) 分野別実感の分析について
  - (2) その他
- 3 閉 会

出席委員等

吉野英岐部会長、竹村祥子委員、谷藤邦基委員、

Tee Kian Heng (ティー・キャンヘン) 委員、山田佳奈委員、和川央委員

欠席委員等

若菜千穂副部会長、広井良典オブザーバー

## 1 開 会

**○高橋政策企画課評価課長** 御案内の時間になりましたので、ただいまから第3回幸福感に関する分析部会を開催いたします。

私は事務局を担当しております政策企画部政策企画課の高橋でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は、若菜委員、広井オブザーバーが欠席しておりますが、運営要領第6条第2項に基づき、委員の半数以上に御出席いただいておりますので、会議が成立していることを御報告いたします。

なお、本日竹村委員、和川委員にはリモートにより御出席いただいております。なお、和川委員は少し遅れての御参加となる予定です。

それでは、開会に当たり、政策企画課評価課長の竹澤より御挨拶申し上げます。

**○竹澤政策企画課総括課長** 本日は、お忙しい中、また朝9時からという早い時間にお集まりいただきまして本当にありがとうございます。本日は、前回まで御議論いただきました分野別実感の変動要因に係る分析について進めていただきますとともに、新型コロナウイルス感染症の影響に係る分析と幸福実感の推移に係る分析についても御意見を頂戴したいと考えております。

6月議会が始まりまして、政策企画部の方にも幾つか質問が来ておりまして、第2期アクションプランの策定についてですとか、あと人口減少問題について詳しく聞かれております。

あと国の動きを見ますと、デジタル田園都市構想の話が出てまいりまして、その中でもウェルビーイングの指標を入れ込むということで、そういった国の動きなどを見ていると、岩手県は国に先駆けた取組を進めてきているのだなと思っておりました。こちらでの御意

見を頂戴して、第2期アクションプランの策定を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

**○高橋政策企画課評価課長** それでは、議事に入ります前に資料の確認をさせていただきます。

本日の資料は、資料1から4となっております。お手元の資料を御確認いただき、もし不足ある場合につきましてはお知らせいただければと思います。

また、前回の部会で御了承いただきましたとおり、今回の部会は非公開としてございます。

それでは、議事に入りたいと思います。運営要領第4条第4項の規定により、部会の議長は部会長が務めることとされておりますので、以降の進行は部会長、よろしくお願いいたします。

## 2 議 題

### (1) 分野別実感の分析について

**○吉野英岐部会長** おはようございます。すみません。朝早くからの招集になってしましまして、しかも終わりの時間は変わらないので、長丁場になりますけれども、何とかレポート作成するために、一応委員の皆様方の御意見の御確認をしないといけないということなので、この時間帯から始めることになりました。3時間ありますので、うまく進められれば簡単な休憩をちょっと取ればなと思っております。よろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第、資料に従いまして進めていきます。今日の議題の最初の分野別実感の分析についてというところですが、今年の明けにやりました令和4年の県民意識調査の属性間の差の分析の結果について、事務局より御説明をお願いします。

**○千葉調査統計課主任主査** それでは、資料1、「令和4年県の施策に関する県民意識調査」属性別分析結果の資料について説明いたします。

この資料につきましては、平成31年から令和4年までの主観的幸福感及び分野別実感の属性別の平均点を折れ線グラフとしたものです。令和4年意識調査結果における主観的幸福感及び分野別実感の結果について、性別、年代などの各属性別における有意差の有無について、一元配置分散分析で確認した結果を掲載しております。

調べた属性の種類につきましては、性別、年代別、職業別、世帯構成別

**○竹村祥子委員** すみません。マイクを、もう少し近くでマイク、よろしくお願いいたします。

**○千葉調査統計課主任主査** はい、すみません。聞こえますでしょうか。大丈夫ですか。これぐらいで大丈夫ですか。

**○竹村祥子委員** はい、大丈夫です。ありがとうございます。

**○千葉調査統計課主任主査** すみません。

調べた属性の種類は、性別、年代別、職業別、世帯構成別、子の人数別、居住年数別、広域圏別の7種類となっております。

各グラフの左上の隅付き括弧の記号で有意差が認められる属性につきましては、アスタリスクの1つから3つで示しております。

また、資料の奇数ページの冒頭、どの程度幸福だと感じていますか等、質問の下の部分につきましては、アスタリスクが2つ、5%水準及びアスタリスク3つ、1%水準で示している属性を有意な差がある属性として、その属性の中で最も高い区分と低い区分について記載をしております。

なお、性別のその他、年代における18歳から19歳、職業における60歳未満の無職につきましては、サンプル数が小さいために分析対象から外しております。

資料の説明については以上になります。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございます。前回からの積み残しというか、追加の説明になっていると思います。

資料1について、御質問さらにあるということであればお願いしたいと思います。

では、ティー先生。

**○ティー・キャンヘーン委員** すみません。最後ちょっと聞き逃したのですけれども、何を除外したのでしょうか。

**○千葉調査統計課主任主査** 分析対象から外している部分なのですけれども、属性で性別の属性のその他と、年代につきましては18歳から19歳、職業につきましては60歳未満の無職がサンプル数が小さいということで、こちらの分析対象からは外しているということになっています。

**○吉野英岐部会長** はい、どうぞ。

**○ティー・キャンヘーン委員** すみません。ずっと関わってきてこういう指摘しているのは、ちょっと感じ悪そうな気がするのですけれども、職業別で60歳以下の無職でしたか。

**○千葉調査統計課主任主査** そうです。60歳未満の無職。

**○ティー・キャンヘーン委員** 何人ぐらいいるのですでしたか。

**○千葉調査統計課主任主査** 人数

**○竹村祥子委員** すみません。マイクが入っていません。

**○竹澤政策企画課総括課長** 音声が入っていないと。

○**ティー・キャンヘーン委員** 私の質問、先生、聞こえましたか。

○**竹村祥子委員** はい、質問までは聞こえました。

○**ティー・キャンヘーン委員** 今調べてもらっています。

○**池田政策企画課特命課長** 前回資料の5の2のところにサンプル数記載してございます。60歳未満の無職につきましては、64人という形になっています。

○**ティー・キャンヘーン委員** すみません。何かの基準でサンプル数は小さいので、除くという話を多分共通認識としてずっとやってきたのですけれども、それで何人でそのサンプル数が小さいとしたのでしたか。ちょっとそれを忘れてしまって。100人未満でしたか。

○**池田政策企画課特命課長** おおむね100人未満

○**千葉調査統計課主任主査** そうですね。おおむね100人だったと思います。経緯を見ると。

○**ティー・キャンヘーン委員** それであれば、例えば資料1の1ページ目なのですからけれども、職業別と書いてあるではないですか。そこを見ると家族従業員86名しかいないので、それも入れて分析をしていませんか。

○**千葉調査統計課主任主査** そちらは入っています。家族従業員につきましては、標本数というのが資料1の一番最後にあるのですけれども、100人を超える年もあり、今年はちょっと少なくなってしまったのですけれども、前後ということで、今回は入れた形で分析させていただいております。

○**ティー・キャンヘーン委員** R4でしかやっていないので、R4しかやっていないのであれば、例えばH31もここに示すのであれば、それはそれで今の説明で納得できるのですけれども、R4しかやっていないので、R4しかやっていないのであれば、そこをちょっと精査して、これまでのルール上100人未満でないデータは全部、多分切った方がいいという意見です。

以上です。

○**吉野英岐部会長** では、事務局。

○**池田政策企画課特命課長** 今のお話ですと、恐らく居住年数10年未満も同様の形になっていて、その数値なのけれども、87名になっておりますので、ここも同じ扱いというような提示でよろしいでしょうか。

**○ティー・キャンヘーン委員** 要するに、居住年数を見てみると、断続的に 20 年以上が一番多いので、あと全体で分析した傾向も 20 年に寄っているというのは見て分かります。なので、やってもやらなくても、多分これは全部そこに寄っているねというのは分かるのですけれども、それ以外ではあまりにも差が激しいので、そこは少し検討を要するのかなと思いました。確かに今載せるのはいいとは思いますが。

**○池田政策企画課特命課長** そうすると、基本的に載せた方がいいというのはそうなのですが、居住年数のところは 10 年未満をそのままにして、職業みたいな、いっぱいあって結構数字も大きく振れているようなところは、家族従業者みたいなものは取って分析した方がよろしいという認識

**○ティー・キャンヘーン委員** そうですね。統一性を考えるのであれば、外した方がいいと思います。ちょっと作業量が多いと思うので。できるなら全部 100 人未満という設定があるのであれば、最初からの約束なので、それは外した方がいいと。

**○池田政策企画課特命課長** 分かりました。

**○吉野英岐部会長** そのグラフは、報告書に載せるのでしたか。今ここにあるやつは。載せる、載せる予定。

**○千葉調査統計課主任主査** 載るものです。

**○吉野英岐部会長** 内部資料ではなくて、公表する資料になるとなると、基準が必要で、今のティー先生の御意見だと、基本的には 2 桁、100 未満のデータ、サンプル数がどこかの年代でも 1 つでも入っていれば、やはりそれは十分な分析に堪えられる数ではないということで、グラフからも一斉に落としてしまった方が理由が言いやすい。あるときは載せて

はい、どうぞ。

**○ティー・キャンヘーン委員** グラフから落とすと、何か隠しているというがあるので、注をつけて、足りないので、これはやっていない、ここは除外しているとした方が、そうでないと独り歩きしてしまいそうな気がします。

**○吉野英岐部会長** 例えば年齢別であれば、10 代はもう外していますよね。グラフからも落ちていきますね。

**○千葉調査統計課主任主査** グラフからも外していました。グラフにあって、一元配置分散分析の方に入っていると、ちょっと分かりにくいところがあって、グラフからも既に外してあるのですけれども、グラフとこの分析結果なり、直接リンクしているものではないので、表現としてどうするかというところ

○竹澤政策企画課総括課長 サンプル数の少ないものは外しますか。

○千葉調査統計課主任主査 そうですね。ここは、サンプル数少ないものの扱いについて、どこかに記載をして、統一的な扱いになるようにしたいと思います。

○ティー・キャンヘーン委員 外す方。

○吉野英岐部会長 少なくとも分析はしないですから、分析はしないということはまず言って、あとはそのグラフに載せるか載せないかですね。

○千葉調査統計課主任主査 そうですね。

○吉野英岐部会長 ただ、グラフに載せると、分析するものとしらないものが一緒に載るので、物すごい動きをする場合、それに意識が引っ張られたりする可能性がないわけではないので、エクセルの一覧表か何かには載せておいていいと思うのですが、グラフ化して分析に持っていくときにはグラフからも外すという、ちゃんと注をつければ、別にデータは非公開にする意味ではなく、間違っただサインを出さないために、グラフにするときは3桁以上のサンプル数を確保しているものについて、しかも4年間全て3桁以上を持っていけばグラフには載せますとすると少しすっきりしますけれども、どうですか。

○池田政策企画課特命課長 そのようにしたいと思います。グラフ上、実感平均値の表の方には載せておいて、一元配置分散分析の分析の方からは取り除く、注釈をつけるというような形で整理をさせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 ティー先生、いいですか。

○ティー・キャンヘーン委員 すみません。去年のレポートを見ていたら、131 ページですけれども、確かに100人未満の方は職業別でこれ全部入っている。でも、同じようにやればいいかなと思います。

○吉野英岐部会長 外しても大丈夫ということですか。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 去年の数を見ても、今回話題になっている家族従業者も119人となっていますし、10年未満も100人ということで、2桁になっているところは属性としてはなかったということなので、今年それぐらいの整理で新しく出てきたので、

それぐらいの整理でいっても特に支障はないのかなと考えて。

○吉野英岐部会長 というのは、3年間の分析ですものね。

○ティー・キャンヘーン委員 いや、1年ずつの分析。

○吉野英岐部会長 3地点。

○ティー・キャンヘーン委員 これ3地点分析していません。この分析というのは、R3かR4の分析しかやっていません。ずっとしているのは載せてあるだけ。

○吉野英岐部会長 ああ、そうか。分析の相手としてはね。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 図としては3年分載っていますよね。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 ただ、図に載せる場合も4年間の数字、去年だったら3年間の数字で、今年であれば4年間の数字で、100以上のサンプル数をできているものについて掲載するという、さらにそこから分析は去年、今年に分とさらに絞り込みをかけていくのですよね。それがちゃんと書いてあれば、特段違ったことを言っているわけではないので、いいのではないかなと思います。

結局あとはこの分析の結果、今日の資料、ページ数は入っていないのですけれども、資料1の冒頭に書かれている黒丸印が2つ、1ページの一番上の令和4年調査結果において、属性別に見ると、性別、職業別、世帯構成別、子の人数別及び居住年数別で有意な差が認められたでよろしいですねということですね、1つは。

それから、さらに性別ではどういう差かということ、女性が高く男性が低い、職業別ではこうである、世帯構成別ではこうであって、子供の人数別ではこうであって、居住年数別ではこうであるという中身の解説と、さらに幸福感の平均値は平成31年調査に比べて有意に上昇しているというのは、令和4年がということですね。

○千葉調査統計課主任主査 そうです。

○吉野英岐部会長 このまとめで間違いがなければ載せるということを確認できればいいのかなと思います。

はい、どうぞ。

○山田佳奈委員 先生、今一区切りついたみたいな感じで、大丈夫ですか。

○吉野英岐部会長 一区切りというか、いいですよ。

○山田佳奈委員 よろしいですか。

○吉野英岐部会長 どうぞ、どうぞ。

○山田佳奈委員 すみません。先ほどのティー先生御指摘だった点、ここの分析表の対応としてはもちろん異存ございません。

実は本日の一番最後に申し上げようかなと思っていたことと関わるので、ちょっと今忘れないうちに申し上げたいと思いますけれども、今回、つまりサンプル数の基準といえますか、一つの基準として100人未満はこの中に載せないといったことだというのは了解しているのですが、そうなりますと、前回もそうですけれども、例えば18歳、19歳の方、60歳未満無職の方が常に参考ということになってしまうと。結局分析の対象になっていない、ならないというのはどうなのかなというのはちょっと気になっております。これは統計上の話ということとはまた別に、少なくとも、これは私自身の意見としてお聞きいただければと思うのですが、部会として、こうしたことを今回の参考値として載せているけれども、ただし今後も注意をしたいということ、注意が必要であるといった、そうした何らかの言及が必要なのではないかなと考えています。今やはり子供さんというか、若い方たちの幸福感というのも重要視されているところだと思いますし、少数意見というのにちゃんと私たちも目を向けているのだよというメッセージが必要なのではないかなということで、一応意見として申し上げたいと思います。

○吉野英岐部会長 事務局、いいですよ、どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 今御指摘のとおりだと思っております。たしか前回、前々回ですか、吉野部会長の方からも60歳未満の無職のところについてお話を頂戴しています。実感平均値の一覧表のところには、先ほどもお話ししたとおり、その部分についてもきちんと載せていくということで、数値上もお見せしながら、分析の中で統計的に出たものに加えて、そういったようなところから解釈という部分をお話ししていただきたいと事務局としても考えてございますので、御意見のとおり進めてまいりたいと思っております。

○吉野英岐部会長 3桁というのは、便宜上と言えば便宜上で、一応目安としてやっている。

ティー先生、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員 例えば今山田佳奈先生のお話で、職業について、この中で100人未満で抜いたのですが、例えば60歳以上の無職について、基準点と比較をしていますよね。そこを見ていないのです。ここからは、この1年分の中でちょっとデータが少ないので、それを抜かないと実はあまり差がないにもかかわらず、すごく差が広がるとなっ



てしまうので、そこは抜くのですけれども、基準年どおり比較はちゃんとしていて、やっぱりちゃんと記述もしているということになっていると思います。補足になってしまいました。

**○吉野英岐部会長** はい、どうぞ。

**○山田佳奈委員** ティー先生、ありがとうございます。私もどこかで何か御意見あったようだと思います。

**○ティー・キャンヘーン委員** 大丈夫です。確認、いいと思います。

**○山田佳奈委員** ありがとうございます。

まずは統計、今申し上げたのは、この分析部会では、どこの質問ということではなくて、全体としての視点というか、部会の視点として、もちろん統計上でどう結果を出していくかという分析としてはもちろんそれとして結果成り立つような、成り立つといいますか、適切に分析できるようなということでやって、その上で、ただし今回こちらの表によっては参考値としているものについても云々かんぬんというような、そうした視点を残してもいいのではないかなと、今そうしたことでした。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございます。

どうしてもこの折れ線グラフにすると4つ載るので、本来の分析というのは、ティー先生が言った基準年と比べて有意に上がっているのか下がっているのかは一応見ますけれども、どうしてもそのデータを持っているので、4年分載せると線でつながってしまうので、動きに見えるのですよね。ですから、そこであまりに上がり下がりが激しいもので、なおかつサンプル数が少ないとなると、本来であればそれを同じ土俵に乗せて見せてしまうとあまりにも変動が多いので、そこは注意をするということで、このグラフ上は落とすけれども、基準年との比較については、基本はサンプル数少ないところも行っただけいいということはどこかに書いていけばいいのですよね。分かりました。

すみません。この資料1の分析結果、幸福感の平均値は平成31年、つまり基準年調査と比べて有意に上昇していると最後まとめますけれども、これはここだけ見ても分からないのですよね。つまり全体の平均値のことですよね。

**○千葉調査統計課主任主査** そうです。

**○吉野英岐部会長** いわゆる属性別分析をする前の全体の結果としてはこういうものですよというのは、違うところに載せるということになるのですか。

**○和川央委員** 県計ということですよ。

**○千葉調査統計課主任主査** はい、そうです。

○吉野英岐部会長 そう。だから、グラフはここにはない。

○和川央委員 このグレーのグラフ

○吉野英岐部会長 県計でいいのかな。

○和川央委員 はい。ちょっと補足が必要なのかもしれないですけども。

○吉野英岐部会長 ああ、そうか。常に県計というところで見れば同じ動きをしているので、全ての属性別分析のところに入っていきますよという位置づけでいいのかな。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 そうすると、これ一番上に来るのではないのですか、記述の順番としては。属性別分析する前に、県計というか、全体値ですね、それがこうでしたというのは、全てのグラフにも引かかる話ではないですか。どっちに書いても事実は同じなので、いいのだけれども、まずは全体の結果をこう捉えましたと。さらに、属性別に分析をすると、これとこれとこれは有意に上がったか下がったということが言えますと、先に総論を言ってしまった方がいいのではないですかという意見ですが、いかがでしょうか。

○池田政策企画課特命課長 そのように整理をさせていただきたいと思います。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

あとは、統計の話なので、統計的に分析した結果をある意味淡々と書いていって、ここ自体では要因に踏み込む話ではなくて、基準年と比べるとこうだったということを資料1でまずはきっちり抑えておくというような位置づけになると思います。

今部長お見えになりましたけれども、どうぞ。

○小野政策企画部長 結構です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

では、資料1については、これまでも議論しているのですけれども、グラフの注釈のつけ方や記述の県計というの意味がすぐ分かる人がいるのかな。警察かと言われると困るのですね。県の全体値ですね、という意味もちょっと入れておけば確実だと思う。(県計)とか、幸福の平均値(県計)とすれば意味が通るのではないかなということで、ちょっとそういう誤解のないような、あるいは紛れがないような記述を少し修正していただいて、中身についてはこれで了承したいと思います。

谷藤委員、どうぞ。

○**谷藤邦基委員** すみません。高尚な話が続いていたので、たわいもない、ちょっとお願いです。

このグラフの目盛りというか縮尺、ある程度統一してほしいなと思って。前回のを見たら、もうかなり細かいので統一してはあるのですけれども、これはこれでちょっと見にくくて、こっちの今回の方が見やすいというのは一般的に言える。広く取っている方が。ただ、例えば地域社会とのつながりを感じますかのところの職業別のところなんかは前と同じ縮尺なので、やっぱりぱっと見たときに、\*が3つついているのですよね。要するに、1%水準で有意な差があると。それだけあるのという感じに見た目は思ってしまう。だから、これある程度縮尺統一してもらわないと、見た目でかなり違った印象を与えてしまう可能性があるんで、ちょっとその辺はどの程度まで統一できるかというのは、実際のばらつき具合によると思うのですけれども、少しそこは検討していただきたいなと思います。

以上、お願いです。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。

ティー先生、どうぞ。

○**ティー・キャンヘーン委員** 谷藤委員おっしゃるとおりですけれども、例えば2つ目のところやからだ健康だと、1つ目は全部4で統一されているからいいのですけれども。

○**吉野英岐部会長** 全体、県計ね。

○**ティー・キャンヘーン委員** 2つ目のところやからだ健康だと感じますかという分に関して、これは結構、3.6とか3.7とか3.5とか、ばらばらではないですか。例えばですけれども、ところやからだの健康で一番高い方に合わせてグラフ、ここは

○**吉野英岐部会長** 3.7。

○**ティー・キャンヘーン委員** 3.7とか3.5でも、3.7ですね。3.7に合わせてつくっていくという感じでもいいのですか。要するに、ちょっと分野別だとばらばらになってしまうので、この分野に関してそろって比較するというところでどうですか。

○**谷藤邦基委員** ぞれで、結構ばらつきが大きい分野だったり実感が低い面とか、いろいろあるので、今ティー先生おっしゃったような形で分野毎に統一してもらえれば、取りあえずはいいかなと思います。水準の比較ということもあるので、やっぱり分野毎に上下のラインを統一してもらおうというのが現実的なのかなと今思っております。

○**和川央委員** 0.1で統一しようと思って作業が及ばずに統一されなかったというものと思います。

○**吉野英岐部会長** マイクないと、竹村先生に。

○和川央委員 失礼しました。

○吉野英岐部会長 あとは、エクセルが自動設定してしまうから、気をつけないと自動設定されているということもあるのですけれども、そこは分野毎で統一しますか。

○池田政策企画課特命課長 分野毎に統一する感じで整理します。

○吉野英岐部会長 そうですね。そうすると、高いところの分野もあるし、低いところもあるので、それ全部一緒にするとかえって見にくいというパターンで、分野毎に分析、このグラフについては同じメモリでいきましょうということでもいいですかね。

だからといって、分析の内容が変わるわけではないですね。

○谷藤邦基委員 だから、たわいもない話。

○ティー・キャンヘーン委員 いやいや、大事です。

○吉野英岐部会長 でも、やっぱりグラフは印象、ぱっと見で勝負するところなので、間違ったサイン出してはいけないというのはそのとおりだと思います。

ありがとうございます。では、ちょっとそういう微修正をしていただいて、これを最後のレポートに載せていくということになります。

続いて、いろいろ前回から御意見、前回のとき、それ以降も御意見していただいていますので、それに対応する資料等々があります。それも併せて説明をさらにしてもらおうということで、今日クリップ留め等々になっています資料2のさらに枝分かれしている部分につきまして、順番にまた補足した部分とかも含めて事務局から説明をいただきます。

ですので、まず最初は余暇の充実、実感が低下したものを中心に行きますので、2—①—1でいいのかな。余暇の充実につきまして、事務局より御説明していただきたいと思えます。ここ、結構解釈難しかったところですが、前回。ですので、いきなり難問が頭に来るのですけれども、事務局よりちょっとやった結果をまたお願いします。

○池田政策企画課特命課長 余暇の充実のところでございます。今回資料2—①—1ということで、レポートの方で毎年まとめているような形の体裁に今までの議論の中での整理をさせていただいているものでございます。

分野別実感の推移といたしましては、実感平均値 2.96 点で 0.09 点基準年より下がっていますよということと、イの属性別の状況につきましては、先ほど御説明をさせていただいた一元配置分散分析の結果を記載している内容となっております。

その下、表1のところにつきましては、第1回、第2回で御議論いただいたときに有意な変化のあった属性として整理させていただいたものを踏まえて、②の分野別実感が低下した要因ということで、理由を総計の結果から、補足調査の結果から導き出しているものでございます。

こちらの方につきまして、最終的には自由な時間の確保、趣味・娯楽活動の場所・機会、知人・友人との交流ということ踏まえて、昨年同様の整理ということになれば、自由な時間の確保が十分ではなかったこととか、趣味・娯楽活動の場所・機会が減ったこと、知人・友人との交流が減ったことというような形での整理になっていくのかなと考えているところでございます。

それに加えて、あと一貫して高値または低値で推移しているものということで、下の表2のところでお示ししていますけれども、低値で推移している属性というものが複数ございます。こちらの方につきましては、前回も低下している要因と同じ理由ということになっているところでございます。

次のページのところは、前回主に御発言をいただいた内容を整理しているものでございます。前回までの整理の中で、1つは高齢の方の実感、そのところがそもそも自由な時間の確保というものに困っていないのではないだろうかというようなお話を頂戴しております、県民意識調査の結果の方から今回整理をさせていただいているというものが2—①—2という形でお示ししているデータになります。

こちらの方につきましては、前回、第1回するときにつきましては、補足調査の余暇の内訳ということで整理をさせていただいたもので御説明をさせていただいたのですが、今回は県民意識調査の余暇の行動時間の内訳ということで整理をさせていただいています。前回との違いということになりますと、行動種別別のところで、補足調査につきましては介護の時間が大きく増えましたよという御説明をさせていただいたところですが、全体調査で見ると、特にその部分について大きな変化は発生していないということになりますし、ほかのところを見ても大きな変化が見られているというところはなかなかないというような状況にあるのかなと考えてございます。

その次のページで、前回話題になりました70歳代の行動時間はどのように推移しているのだろうかというものを整理したのがこのグラフになります。こちらにつきましても、特に経年で見ても大きな変化が見られないという状況にございますので、各年代毎、その次のページですね、年代別にそれぞれの行動時間の状況、推移というものをお示しさせていただきます。70歳以上のところには黄色く着色をさせていただいているのですが、身の回りの生活の部分御覧いただいても、年を経る毎に少しずつ増えていってはいりますが、極端なものというのは、その次のページ、⑤の仕事、収入というところをちょっと御覧いただきたいと思うのですが、そこを御覧いただくと、やはり60歳のところから減ってきて、70歳でかなり減るということになっておりますので、ここを御覧いただくと、どうやら仕事という時間が自由な時間の確保というものにつながっていているのではないだろうかという、60歳以上の無職の方については自由な時間がある程度確保されているのではないだろうかというような整理になるのかなと考えてございます。

あと、参考までにですが、その後ろに過去3年間の変動要因としてこういうのが挙げられていましたよというものが、ちょっと前回議論になったところがございますので、参考まで各年度つけてございますので、御覧いただければと思います。

事務局からは以上です。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございました。

真ん中にある各委員からの意見については、これはいいのかな、説明は。たくさんあるから。今日の今の資料の3枚目

○池田政策企画課特命課長 そうですね。

○吉野英岐部会長 3枚目の表と裏。

○池田政策企画課特命課長 前回までの意見の内容ということですね。

○吉野英岐部会長 はい。これは、これ自体はレポートには載らない。

○池田政策企画課特命課長 これ全部を載せるということは、基本的に考えてはいないのですけれども、できればレポートの中に主な重要な御意見とか、あと提言のようなものを頂戴している場合につきまして、そういったものをレポートの最後の方に取りまとめてはどうかと今考えています。ちょっとそこら辺のところにつきましては、載せ方も含めて、追って御相談をさせていただければと考えてございます。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

では、まずこの余暇の充実、実感が低下している分野の一つであると。したがって、より詳しく分析をして、なぜ実感が低下したのかについて、今年のレポートにはその結果を書きたいということで、全体の県民意識調査に戻って、そこには幸福の項目だけではなくて、活動時間に関する質問項目があるので、それをもう少し集約した形でまとめてみたところ、あまり大きな時間の変動は、年によっての変動はなかったと。ですから、物理的な時間がすごく本当に減っているかということ、そういうわけではないようにも見えるけれども、実感としては60歳以上の無職の方のところは実感が下がっているということがあるので、それをどう考えるかということをもとめていただいたものです。

これについては。

ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員 ちょっと教えてほしいのですけれども、一番最後の参考の資料にアンダーラインしているのですけれども、すみません、ちょっと私事前説明を受けていないので、アンダーラインの意味は何ですか。

○池田政策企画課特命課長 アンダーラインのところにつきましては、変化があったところを何となくピックアップしてみたところでした。例えば横ばいのところなんかで見ると、一番最初のときは知人・友人との交流というのがあったのですが、翌年になると知人・友人との交流が一回消えて、また知人・友人との交流が出てきているというところがあったので、そのところが見えた方がいいのかなと思ったので。

○ティー・キャンヘーン委員 ありがとうございます。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○和川央委員 今回低下した実感の低下寄与度を見ると、「女性」と「70歳以上」の2つの属性が非常に寄与度が高いので、この2つの影響が大きいのかなと思っています。今回いただいた分析結果で余暇時間が実際「70歳以上」は上がったのか下がったのか、「女性」は上がったのか下がったのかを教えてくださいませんか。

あわせて、余暇時間が今回515分から507分に下がって、これが有意かどうかは分からないのですが、これは残差で計算しているのだから、逆を言えば増えたところが多分分かるのだと思うのですが、この515から507に減ったことによって、何が減ってこの余暇が減ったのか教えてくださいませんか。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○山本調査統計課主査 ただいまの御質問でございますが、資料2—①—2とつけてある表を御覧いただきたいと思っております。属性、先ほど和川委員からお話があった、例えば女性の属性というところまではちょっと改めて資料を作らないと難しいかと思うのですが、お話の中にあつた余暇時間が減っている、これは残差で取っているのだから、どこかが増えているはずだという考え方については、この表の下半分の横棒グラフ、これが行動種類別、全体の合計にはなっていますが、行動種類別に出ていますので、一番下、参考として載せている余暇時間がただいま御指摘のとおり515から507に減っている。その反動がどうかというものが、上の方にある睡眠からその他までの各変動の反映という見方をいただければよろしいかと思っております。結果、今ざっと見て、ちょっと有意かどうかというところまでは至らないのですが、特定の何かがあるかというよりは、ちょっとずつの変化の合計で余暇以外が増えて、結果残差で計算している余暇が減ったという印象がございます。あえて言えば、仕事の時間が9時間ほど増えてはおりますが、ほかの項目で、例えば身の回りの用事などが6時間ほど減っているということもございまして、やはり特定の行動種類が増えたからというよりは、全体の増減が足し合わさって、最後は残差を取った余暇時間が515から507、マイナス8という結果になったということかと現時点では思われます。

以上です。

○吉野英岐部会長 はい、どうぞ。

○和川央委員 ありがとうございます。女性については資料がないというのは了解いたしました。

70歳以上の年齢別については、活動時間の資料があるので、これを差し引いた余暇時間がどのくらいあるのかなと思ったのですが、資料中のどこかに出てきませんか。

○吉野英岐部会長 最後に余暇の合計値はないのかという御質問ですね。

○山本調査統計課主査 すみません。計算した数字を用意しておりませんでしたので、残差で差し引くべき数字の方は表に掲載しておりますが、ちょっと引いた結果、計算してございません。この表、資料のどこかに書いてあるという状態になっていないです。申し訳ありません。

○吉野英岐部会長 今のところ、計算すれば分かるけれども、資料はないと。

8分とか、10分ぐらいですからね。さっき時間、実は分だから。8分減ったらすごく減ったと感ずるかというのと、よく分からない。1時間ぐらい動けば、かなり違う気もしますけれども。ちょっと出せば出せるので、女性の方もこういった同じ年代別、さらに合計値の余暇時間を出せばいいので、もしそこでも数分程度の動きしか見えないとなると、時間的な資源が本当に減ったというようなことはちょっと言いづらいかなというね。でも、余暇時間充実というところで、質もあるので、質的なレベルの話だと、むしろそういうのはやっぱり実感値が下がっているということについてどう考えるかというので、最後のティ一先生がちょっと指摘した参考の補足調査の方から要因として挙げられたものとしてはこういったものが上位に来ているということでした。

はい、どうぞ、事務局。

○池田政策企画課特命課長 すみません、70代の余暇時間ですね。70代の余暇時間のところにつきましては、507分になります。R3が515で、R2が536、H31が517という形で、R2で一回増えて、R3、R4で減ってきているというような状態

○吉野英岐部会長 それは、この資料のこれと同じ数字ですか。

○池田政策企画課特命課長 そうです。

○吉野英岐部会長 これは年代が込み込みだから。これは全員の分ではないですか。資料2—①—2のこの帯グラフ。

○池田政策企画課特命課長 すみません。今行動履歴の方に出ているデータが70歳以上の時間になっているので、最初のところ、その時間と合致したのがそういう意味。

○吉野英岐部会長 では、この横帯グラフは、2—①—2のトップページにある横帯グラフは、70歳以上の方の数字。

○池田政策企画課特命課長 になってしまっています。

○吉野英岐部会長 下の行動種類別も同じく70歳以上ですか。



○池田政策企画課特命課長 行動種類別はそうです。

○吉野英岐部会長 行動種類別のグラフも。

○池田政策企画課特命課長 そうです。

○吉野英岐部会長 では、高齢者だけ  
ティー先生、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員 その次のグラフを見ると

○吉野英岐部会長 裏側ですか。

○ティー・キャンヘーン委員 次のページを見ると、睡眠時間が合わないような気がする。  
447分。

○吉野英岐部会長 70歳以上。

○ティー・キャンヘーン委員 70歳以上と考えていいのですかね。

○吉野英岐部会長 では、これ見れば高齢者の動きは分かるけれども、あまり変わっていないように見えますね。

いいですか。では、70歳以上のグラフであったということで、ちょっと訂正ですね。

そうすると、やっぱりあまり動いていないように見えるので、数分程度の上下しかないので、自由な時間の確保を上を上げてくる、実感低下の人たちでこれをトップに入れるのですけれども、物理時間は変わらないようにも見えて、自由な時間というのが足りなくなったかなという感じですかね。自由な時間というのが余暇時間とイコールではないということなのですかね。余暇時間の中に。

では、谷藤委員。

○谷藤邦基委員 それは、私が最初に違和感があると言ったのが何か尾を引いてしまっているのですけれども、やっぱり70歳以上とか60歳以上の無職の方が自由時間の確保が要因で実感が低下したという話は無理があると思うのです。直感にも合わないし、それを裏づけるデータも出てこないと思っています。ただ、作業手順としてまとめていくところなるというのも理解できる。要因の方は補足調査から取っているのだから、補足調査の方がどちらかというと高齢者が意識調査より少ないのですね。

○吉野英岐部会長 そう、そう。

○谷藤邦基委員 そう思うと、割と現役世代の方が確かに要因としては大きいのだと思う

けれども、高齢の方々が、それが理由で下がっているというのはちょっと無理があって、ただほかの2つはいかにもありそうな話だから、直感にも反しないので。だから、結局あとはまとめ方の問題だと思うのです。

実は昨年のレポートをよく見ると、70歳以上と60歳以上の無職の方が出ていて、やっぱり自由時間の確保というのは一番の要因にあがっている。だから、これは手順として間違っていないし、このとおりなのだけれども、誤解を招かないように、本文で何か注釈一言入れるという程度でいいのかなと、私としては思っています。だから、例えば以上を踏まえとかと要因のところに最後のポツで書いてあるのですけれども、要因はとなって、その次に、例えばですよ、例えばその他の属性に当てはまるわけではないものとかと一言入れて項目並べるとか。いずれちょっとそこで違和感を持つ人が多いのではないかなと思うのです。やっぱり誤解招かないためには、何かそういう一言入れておくということで、それが現実的などころではないかなと今思っているのですが。

○吉野英岐部会長 事務局、どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 私どもの方としても、自由時間の確保のことについては当然働き盛り世代のことも必要だと思っていますので、注釈という形で、60歳以上の無職の方等については、女性についてはみたいな形で入れたいと思いますので、その辺の表現につきましては改めて御相談をさせていただきたいと思っております。

○吉野英岐部会長 では、山田委員、どうぞ。

○山田佳奈委員 すみません。前回と関わるかもしれないのですが、これは前回資料です。平成28年から、つまり基準年以前からの動きということで、前回資料ですと資料5-2の②ですか、そののところにいろいろ、平成28年からR4の分野別実感の推移を載せていただいているものなのですが、年代が70歳以上というところで見ますと、前回も御意見あったかもしれませんが、平成31年がかなり高くて、その前、平成28年から30年を見ますと、比較的R4とあまり大きな違いというのが見えないということで、ちょっと一回上がってまた下がるという、先ほど谷藤委員さんがおっしゃったように、本日資料の方では、資料2-①-1のところ、例えばt値で推移している属性というところで見ますと、2ページ目に当たりましょうか、こちらでは平成28年からの推移が書かれていて、それで1ページ目に戻りますと、平成31年からの推移となると、一応それは少し読み方が難しくなるのではないかなと。つまりこちらの1ページ目の方の分析では、平成28年から30年の動きということは特に触れられていないので、ここをどう比較するかなという、つまり平成28年から30年の動きというのを一応何かちょっと注意しておかなくていいでしょうかという、ちょっとそういう意見でございました。

○吉野英岐部会長 連動ですよ。だから、基本原則毎年レポート作っているの、前もありましたけれども、今年の令和4年と基準年の比較をまずはやりますと。だけれども、だんだんデータがそろってきて、一貫して何とかだということも一方で言えるわけで、そ

こについての記述、分析についてどのぐらいやりますかというか。

はい、どうぞ。

**○山田佳奈委員** すみません。例えばそれこそ「ただし」として、今回注目した平成 31 年から R 4 についてはそうだったと、前段としてはこのような結果で、このような要因、つまり②の分野別時間が低下した要因についてはこうだけれども、もし入れるとすれば、ただし平成 28 年から 31 年のということで、全体のトレンド入れるか。というのは、次のページで 28 年からのトレンドが入っているの、どうバランス取るかなというのはちょっと悩ましいところですね。

**○吉野英岐部会長** 事務局は何かプランありますか。

**○池田政策企画課特命課長** 当初部会で御議論が始まったときの考え方からすると、基本的には基準年、いわゆるアクションプランが始まった平成 31 年からの状況を見ていくところで、R 2 年度の御議論のときに、さはさりながら一貫して低値で推移しているものというのを見ていこうということもお話としてあって、追加され、ちょっと基準としてばらつきが出てきてしまっているというところでもあるのですが、そのときに一貫して低値、高値をどう見るかというときに、ちょっと幅広で見て、中長期的に一貫して動いていないものこそ政策的な課題として認識できるではないかというような形で現在のところは整理していることかと思えます。

トレンドの話というところになったときに、今回今日の資料 4 のところで御説明をしていくような形にはなるかと思うのですが、幸福実感というのはアクションプラン始まる前にこういう状態で、期間中についてはこういう状態で推移しているという全体的な推移を今回取りまとめる、新しいアクションプランを策定するタイミングということで整理をさせていただいているのですが、それは毎年度やるかどうかという考えもあるかもしれませんが、そこは分析上大きく変わってくるものがあるのか、見えてくるものが何かあるのかというところなのかなと思っていて、最低限必要なものとしては政策評価上の P D C A 回していくために何を、この推移をきちんと把握するということは最低ラインとしては当然あるのですけれども、今のようなお話の部分がある程度どう見えてきて、それで見えてくるものがあれば、当然政策の方にも生かしていけるものなのかなと考えてございますので。すみません、そこの出来栄のあたりが私のところでいまいちイメージできていない状況です。

**○吉野英岐部会長** 和川委員、どうぞ。

**○和川央委員** 結論からいうと、削るもしくは参考という形でいいのかなと思えます。

理由は 2 つあります。当初の発想は、今現在低いのではなくて、ずっと低いものは課題だよ、見なければいけないよねということだったと思います。ただ基準の中で、例えばデータがないよね、だから最も古いところから見ていこうねということで、便宜的に 28 からやってきたかなと思います。基準年については、今ある程度古くなってきて、もうデー

タ蓄積したのであれば、それは特にこだわる必要はないのではないかなというのが1つの理由です。

2つ目の理由として、削ったときと残したときの分析結果は変わるかという、過去はもう常に高値、低値というのは消しても消さなくてももう変わらない事実なので、分析とすればなくてもあっても結果は変わらないということを考えれば、削るか、削るのが気持ち悪いのであれば、参考で入れるかでも、見せ方とすれば結果は変わらないかなと考えます。

○吉野英岐部会長 はい、事務局。

○池田政策企画課特命課長 すみません。今の御議論を踏まえると、例えばH28からで整理していますがけれども、H31から低値、高値で推移しているものという整理でもいい

○和川央委員 結果は変わらないので、私はいいかなと思うのですが、見せ方として。あるいは、もしも気持ち悪ければ参考で載せるかというやり方

○ティー・キャンヘーン委員 マイクを。

○和川央委員 失礼しました。

○吉野英岐部会長 マイクがないと竹村先生が。

今年書くレポートがどういう位置にあるかというのは、最初部長さんおっしゃったとおり、アクションプランの改定時期に入っていると。そこで、この前期4年間の成果といたしまししょうか、課題というか、それを踏まえてアクションプラン後期精度を上げていくというようなときに、こういったデータを十分活用してもらいたいという意味もありました。特に今年に限って言えば。そうすると、平成28年から全部見るというのは確かにあれですけども、31から、基準年から4回分程度あって、3年間ですけれども、ここが結局3年ずっと動かないではないかと、一貫して低いというようなものについては、確かにその要因や背景というのがなかなか難しく、そう簡単にこれだという明確な分析は難しいという一方で、しかし一貫して低値というものをそのまま置いておくわけにもいかないかという議論が例えば県庁側の方であれば、要因分析はとにかく一貫して低値であるというのはここだということを書き込んでおくことは意味があるのではないかなと私も思います。

ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員 議論を全部多分前に持っていくのですけれども、一回ちょっと教えてほしいのですが、資料2ー①ー2、これは平均値でいいでしょうか。

○吉野英岐部会長 この帯グラフですか。

○ティー・キャンヘーン委員 全部。

○吉野英岐部会長 これ高齢者だけと言っていましたよね、さっき。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 70歳以上の。

○山本調査統計課主査 回答総数を割り算していますので、平均値になります。

○ティー・キャンヘーン委員 平均値ですよ。実は何かというと、これ第何回、前回ですか。すみません。第2回ですね。第2回資料の同じように資料5—2です。資料5—2で、3枚目、余暇が充実していると感じますかということなのですが、先ほど山田委員が指したページですか。何を言いたいかということ、これで平均値をとるしかないかもしれないですが、70歳以上で1,055人いて、実は60歳以上の無職においては80人しかいないのです。だから、70歳以上でも結構もしかしてみんな働いている可能性もあるのです。これをそのままガッチャンコすると、何も出てこないのではないかなとちょっと思ったのです。

○吉野英岐部会長 打ち消してしまうということ。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。

○吉野英岐部会長 働く時間が入っている人と入っていない人が込みになっているということ。

○ティー・キャンヘーン委員 少なくとも60歳以上の無職をもう一回出してもらった方がいいのかな

○吉野英岐部会長 でも、何かこれだけ見てもすごく仕事時間は短いですよ。平均値でも79分しかないから。

○ティー・キャンヘーン委員 では、70歳以上、みんな仕事しているというイメージの認識しているということですか。

○吉野英岐部会長 仕事しているけれども、時間は1時間ぐらいしかない。  
谷藤委員。

○谷藤邦基委員 だから、そこが平均したらそうなるなので。

○吉野英岐部会長 そうか、そうか。

**○谷藤邦基委員** 例えば1,000人以上いらっしゃるということであれば、そのうち100人の人が何時間か増えても、全体数十%ぐらいの分しかないから、割り直してしまったら大した数字にはならないということはあるので、そこは私もちょっと懸念はしたところでは。特に基準年と比べても12分違いますので。だから、特定の人たちの仕事時間が増えているという可能性はあるかもしれない。

**○吉野英岐部会長** その人たちが若干勤務時間が減っている

**○谷藤邦基委員** という可能性はあるけれども、あくまでもそういうことが考えられるよねというレベルなので。だから、逆に言うと1,055人の方々がみんな12分余計に仕事しましたというのも、それは意味のあることだから、特定の人たちが増えている可能性はあるかもしれないけれども、そこは把握できるのかなというところですよ。

**○吉野英岐部会長** はい、どうぞ。

**○ティー・キャンヘン委員** ちょっとすみません。意味があるか分かりませんが、70歳以上で仕事する、しないでソートして、もう一回見せていただきたいなど。ちょっとすみません。この理論で峻別するのは、すみません、何か私本当に説明を受けていないので、ちょっと納得できないなどというのがあります。すみません。

**○吉野英岐部会長** もうちょっと対象を絞り込んでというようなことですね。

結局70歳以上といっても、仕事をしている人も入っているし、仕事をしていない人も入っていると。平均だと79分程度の仕事時間になっているけれども、みんなが全員79分という意味ではないということですよね。これを、だから仕事をしている、していないでソートできるかどうか。あるいは、働く時間の実際の

はい、どうぞ。

**○山本調査統計課主査** 今御議論いただいている属性のうち、60歳以上の無職というカテゴリーについては、シンプルに設問で聞いているものではなくて、年齢に対する回答、それから職業をお持ちかどうかの回答から合成して作っております。恐らく集計できるとは思いますが、そういう作業が途中に入るので、ちょっと着手してみて、その結果でということにさせていただければ、この場ではそうさせていただければ大変助かります。

**○ティー・キャンヘン委員** 作業は多いのですが、ちょっともしそこまでやっていただけたら、70歳で有職、無職でまたソートできるので、さらに60歳以上の無職でというのでやっていただくと、意味ないかもしれませんが、これだけではちょっと、すみません、全部がごっちゃになっていて、なかなかちょっと何も見えていないという感じはしています。

**○吉野英岐部会長** 分析屋としては、ちょっと納得し切れていないということですね。

○**ティー・キャンヘーン委員** すみません。

○**吉野英岐部会長** だから、そこは技術的にできるのであれば、ちょっと統計をもう一回再集計していただいて、ティー先生なるほどと。

○**ティー・キャンヘーン委員** いや、いや。なるほどと、皆さんが。

○**吉野英岐部会長** 思われるような作業を一つ追加で欲しいのと、もう一つは結局この余暇の時間の低下というものの対象が現役世代の余暇時間が常に低いので、政策的にはやっぱりそこをきちんと確保すべきだという政策をもうちょっと強く打つか、やっぱり高齢者が落ちているのだから、高齢者の余暇時間の充実こそ、実は大事な政策課題であって、そこがきちんと手を打っていないと、高齢者の心身の健康、あるいは幸福度に十分な反映がされないのではないかということもあって、やっぱり高齢者の方も政策的には課題ですよというのであれば、やっぱり高齢者の中にもっと精査してこうなのだというのも必要かなと。さっき言った一貫して低値というは、これ現役世代入っていますから、結局現役世代が中心の社会の中で一貫して低値というのも、3未満というのもこれはこれで大きな課題ではないのかという御意見も多分あるだろうなと思います。

ですから、これをどう政策的に生かしていただくかによるのだけれども、高齢者の分析ばかりされてもねというような発注側の狙いがあるのであれば、やっぱり現役世代が一貫して低値のままで動かないと、だから実感が得られていないということに対しては、4年間の、令和4年の1地点だけではなくという見方も必要かなというのは、多分山田先生の御意見を私なりに解釈すると、そういったところにも目をつけた方がよろしいのではないかという御意見ですけれども、ほかの委員の先生はいかがでしょう。

谷藤先生。

○**谷藤邦基委員** ここまでの話まとめてちょっと私今気づいたことというかありますけれども、まず1つは高齢者の方の話ですけれども。

○**吉野英岐部会長** まず高齢者。

○**谷藤邦基委員** 60歳以上の無職の方は684人いるのですが、この中には70歳以上の無職も当然含まれていますよね。

○**吉野英岐部会長** そうですね。

○**谷藤邦基委員** そうすると、逆算すると70歳以上の有職者はかなりの数いる可能性があるかと。

○**ティー・キャンヘーン委員** そうなのです。

**○谷藤邦基委員** だから、ここはちょっと吟味して分析してみる必要はあるかもしれないです。だから、高齢者がそこまでして、本当に稼ぎたくて稼いでいる人もいるだろうけれども、そうでない人もいるのだとすれば、だとすればですけれども、そこは何か対策が必要かもしれないし、ちょっとここは一回深掘りしてみる必要があるかもしれないと思った次第です。

あともう一つ、一貫して低値、高値の話ですけれども、ここは今和川さんから話ありましたが、昔のことはもうどうでもというか、昔のことは今さら見てもしょうがない。項目は1回でも3.0を超えたら落ちている項目なのです。一貫してと言っている以上は。ということは、ここのデータで大事なものは、例えば昨年度、今年度、ここの項目多分全く一緒なのですよね。だから、これが消えていかないということが問題なので、そこを何か書く必要があるのではないかと。変わっていないと。いずれ3.0を超えたら項目として落ちているわけですから、低値の方はなくしていくことが目標になると思うので、そこを意識した書き方してあげればと。

**○吉野英岐部会長** 卒業できないと。一貫して3を取れないと。やっぱりそれは事実だから、書くべきだと。

和川委員。

**○和川央委員** 失礼しました。先ほど誤解を招く表現だったかもしれないので、すみません、補足をさせていただきます。

削除すべきと言ったのは、ここをばっさり削除する意味ではなくて、28から30のデータを見えなくしてしまえば、先ほど山田委員が言ったように、分析自体の差というのが見えなくなるのではないかという意味合いのつもりでした。ここを全体削除しろという意味ではなくて、山田委員の御懸念の28から30というデータを見えなくしても変わらないのではないのでしょうかという趣旨だということ、改めてお伝えします。

**○吉野英岐部会長** あるいは、参考値だと。

**○和川央委員** はい、そうですね。

**○吉野英岐部会長** データ取っている以上は、数字はあるので。しかし、集中して考えるべきは31以降。それは、アクションプランの考え方としては合っているのですよね、この4年間ということが対象になるから。前見ても確かに差が出るというような参考としてはやれますね。

部長、どうぞ。

**○小野政策企画部長** 今自分で納得したのですけれども、この平成28年から取るのと平成31年からのデータを見るのによって、一貫して3.0以下というのを見るという場合は、もしかすると結果的には多分ないと思うのです。出てくる項目が違う可能性がありますよ



ね。

○和川央委員 同じですね。

○小野政策企画部長 同じですか。28 から、例えば 28 に 3.0 を超えていた場合というのは。

○和川央委員 ああ、過去に。

○小野政策企画部長 ただ、谷藤さんから聞いて、去年と同じだと言っているのですが、多分結果的には変わらないと思います。だから、可能性とすると、削ると項目が増えると、そういうこともあるのかなとは思いますが、ただ過去の 31 年以降の数値を見るといったことでいいのかなと。去年までの蓄積がありますので。ということで納得しました。以上です。

○吉野英岐部会長 分析対象としては 31 以降を見ると。数字は数字として載せてもいいと。

○和川央委員 すみません。基本的に増えないという前提で私お話ししたのですが、確かに増える可能性があるのであれば、ちょっとまた私の申し上げた提案は少し変わるかもしれないです。すみません。

○吉野英岐部会長 いいですか。

では、すみません、ちょっと竹村先生は、この余暇のところは何か御意見ありますか。

○竹村祥子委員 今まで皆さんの御意見が出ていたので尽きるかなとも思っていて、結論からいうと参考値で 7 年分の折れ線グラフが入るのがいいと思います。平成 31 年を基準にして、その前が特別なデータの変化ではないということの証明がそのままグラフからわかるので。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

データ出すこと自体は別に問題はないので、ただそれが私たちは平成 31 年以降を分析対象として見ているものの補足的に使うというスタンスを見ている側にきちんと伝えられれば、データを出すこと自体は問題ないと私は思っています。本当は、途中で線の色が変わったり、折れ線が実線になったりすると、実線部分を分析対象にしていますよということで、目で見れば分かるということに。そうすると作図が面倒になるので、同じ実線でもいいですけれども、31 を太線になるとか、そんな細かいエクセル作業ができるのか分からないのですけれども、ちょっとその辺りは、あるいは文章で補えばいいということで、せっかくデータを持っているし、信頼性の高いデータだと思っていますので、申し訳ないですけれども、参考値で分析

○**竹村祥子委員** 本文の方には入れる必要はなくて、基準年からの分析でスタートしていると思っております。

○**吉野英岐部会長** はい、分かりました。ありがとうございます。分析自体は基準年とということで、一応方向性は大体まとまりましたけれども、さっきの話、ちょっともう一回分析してみないと、特に高齢者の動きについては仕事の有無というのがもうちょっと利くのではないかというお話がありましたので、そこを少し深掘りして、すみません、もう一回深掘りしてください。確かに高齢者も働く時代になってきているのは間違いないし、人手不足だ何だかんだ言われて、定年延長もあって、もしかすると高齢者が悠々自適なんていうことは昔の話だと言われかねないので、その辺りもう少し先取りしている形になるかなと思っております。

はい、どうぞ。

○**山田佳奈委員** 今吉野先生がおまとめになられた形で私もぜひお願いしたいと思っていました。それで、グラフをもし作っていただけのでしたら、今回の資料4の7ページが大変分かりやすいグラフを作ってください、後ろの方が、図3という分野別実感平均値の推移という、資料4の7ページですが、これ大変分かりやすく、真ん中のところに点々、点々というのが引いてあるので、もし作図が点線と太線というのがちょっと難しければ、この点線を入れていただければすごく分かりやすいのではないかなと思いました。すみません、意見です。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。これ、多分このグラフ使う予定なのですよ、図3は。どうしても言葉で補わなければいけないところも少しあるかなという感じがしますね。

それでは、ちょっと追加の宿題出ってしまったので、余暇については今もう一つ、どうぞ。

○**和川央委員** すみません。最後に言おうと思っていました。1点、②番の分野別実感が低下した要因の1ポツ目なのですけれども、ほかのところみたいに本当に属性が満遍なくであれば幅広く存在しておりという表現は当たっていると思うのですが、今回の特定の属性にターゲットを絞ってこうやって掘り下げて議論している中で、特徴的な属性は確認できませんでしたという表現が果たして正しいのかどうか。ただ、ここをどう表現するかの案は持ち合わせていないのですけれども、こういう表現がいいかどうか、少し疑問を持っていましたというのをお伝えします。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。  
どうですか、事務局。

○**池田政策企画課特命課長** 今御指摘ございまして、そのとおりだと思っておりますので、

ここの部分については、例えば女性もしくは70歳以上等の属性

○吉野英岐部会長 無職ね。

○池田政策企画課特命課長 ええ。等の属性について、特徴的な属性があったということ踏まえて、次回の御議論を踏まえた文言の修正をしていければなと思っております。

○吉野英岐部会長 追加分析やるということは、結果が変わるかもしれないということですよ。ここは、ぜひ正体を突き止めて、どうして実感が下がるのかとか、どういう人が本当に下がっているのかということが分かればもうちょっと書けますよね。そうでないと、何も分かりませんでしたということになってしまうと。

はい、どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 それで、そのところはそのとおりだと思っておりますが、先ほどお話あったとおり、多分高齢無職の方々の属性が必ずしも全体に返ってくるわけではないと思っておりますので、ここの分野別実感が低下した要因としては、ここの中で、高齢無職のところは追加でどのように記載するかというような整理のところ今このところ理解はよろしいでしょうか。

○吉野英岐部会長 でも、この余暇の低下のところは、年代別というのが利かない可能性もあるですよ。70歳で切ったとしても、その意味がほかの項目とのクロスのとくと意味が違って、70というのはいろんな人が混在してしまうのです、余暇については。つまりそもそも物理的に時間を持っている70歳以上の人もいれば、忙しくて働いている70歳以上の人もいて、70歳以上の人だからこういう共通の特徴がありますよねというのが言いづらいために、さらに追加分析をかけているので、ちょっとそこはこの年代でカテゴリー切って70歳以上だからこうだというのは、これは間違いではないけれども、効き目のあるカットなのかというと、ちょっとどうかなという思っています。ここに限ってですよ。

○ティー・キャンヘーン委員 やって見ないと分からない。

○吉野英岐部会長 そうなのです、そうなのです。

○池田政策企画課特命課長 そうすると、自由な時間の確保というファクターのところいろいろなものが効いてくる可能性がある。

○吉野英岐部会長 ちょっとここはさらにやっぱり混ぜこぜにならないように、70歳以上あるいは60歳以上のところをいろんなカットしてみて、そこで分析かけてみましたというのを追加してもいいです。

○池田政策企画課特命課長 分かりました。ありがとうございます。

**○吉野英岐部会長** お願いします。

ということで、ここは結構時間がかかった。まだ結論出ていないのですけれども、次の地域社会とのつながりについて、資料 2—②—1、これについて御説明をお願いします。

**○池田政策企画課特命課長** 地域社会とのつながりで、2—②—1になります。こちらの方につきましては、前回御説明しているとおりの、実感平均値については 3.10、基準年よりも 0.25 低下しているということで、分野別実感は低下と考えてございます。

一元配置分散分析の状況については、イの属性別の状況の令和 4 年県民意識調査の状況に記載してございますし、令和 4 年県民意識調査と基準年の比較ということで、表 3 のところに属性別の有意な差があったものについてお示しをしているというところでございます。

前回資料 6 等のところで御説明しましたとおりの、要因といたしましては現在のところ隣近所との面識・交流、自治会・町内会活動への参加、その地域で過ごした年数というような要因が整理されているという状況でございます。

前回の御発言のところについては、後ろの方につけてございますけれども、大きなポイントとしては、例えば沿岸の方の実感の変動ですとか、あとは地縁的な活動そのものに対しての状況がどうなっているか、その辺のところについては年代別ですとか地域別で見ていく必要があるのではないかなというようなお話を頂戴していたところでございます。

これを受けまして、今回資料といたしましては 2—②—2 ということで、地縁的活動につきまして圏域別と年代別に分けた状況でお示しをさせていただいております。こちらの方を御覧いただきますと、例えば補足調査の方ですと、何か沿岸で特徴的な動きがあったようなところもあったのですが、今回の地縁的な活動を見てみると、圏域別に見て特段大きな特徴的な動きがあるようにはちょっと見受けられないのかなと思っております。

その下の年代別の地縁的活動状況を御覧いただきますと、60 代が一番活動としては高く、20 代が低いというような状況になっているというものになっています。

その次のページ以降のところについては、圏域別の各圏域の年代別でお示しをさせていただいております。こちら御覧いただきますと、大体 60 代、70 代、40 代が高めに出ていて、やはり 20 代が低く推移しているのかなというような状況で動いているというものでございます。

圏域別になりますと、やっぱり特にも沿岸、県北で 18、19 歳の件数が非常に少ないということもありますので、留意が必要になっているというグラフでございます。

事務局からは以上です。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございました。

地域社会とのつながりの実感が低下しているので、その背景、要因を追加で分析していただくということです。これについては御意見いかがでしょうか。

では、和川委員、どうぞ。

**○和川央委員** ありがとうございます。資料 2—②—2 の地縁的活動状況というもののなの

ですけれども、まず意識調査を見ていて、近所でどういうお付き合いをされていますか、近所で付き合いされている数はどれぐらいですかという設問があるのですが、地縁的活動状況というのはどの設問に該当しますでしょうか。

○吉野英岐部会長 県民意識調査ですね。

はい、どうぞ。

○山本調査統計課主査 設問の拾い方としては、近所との付き合いの方ではなくて、その次のところに、あなたは現在地縁的な活動、スポーツ、趣味、娯楽、ボランティア、NP O活動をされていますかという設問があるかと思えます。こちらの方のストレートに地縁的な活動という調査項目を使って活動している、活動していないという御回答を集計して、このグラフにしております。

○和川央委員 分かりました。ありがとうございます。

○吉野英岐部会長 そのほかいかがですか。

これみんな下がっているという。

ティー委員。

○ティー・キャンヘーン委員 今の説明だと、20代がめちゃくちゃなにもしていないというか。20代少なくはないよね。

○吉野英岐部会長 サンプル数。10代も低いけれども。

○ティー・キャンヘーン委員 10代は少ないので、10代は52名しかないの。それにしても少ないです。20代が低いう感想を持ちました。

○吉野英岐部会長 しかも、やや下がり、20代は。全体的に少し右下がり型に見えますけれども、どの地域見ても。若い人は地縁的活動のアクセスがなかなか今ないので。昔は消防団に出て鍛えたとか、そういうのがあるけれども、そういうのより自由意志でやるということで、全体が下がるのかな。

あとは、県央というのは全部低いのですよね、どの年代も。県央というのは盛岡広域のことなのかな、大体。盛岡広域のところは、高齢者になってもと言ったら悪いですけども、お年を重ねてもそんなに増えないというか、40%届くか届かないかで、ほかのところは50%超えを、緑のラインなんかは50%あったところもありますけれども、盛岡だと40にも届かないので、盛岡全体でこの地縁的活動がやっぱり全体に低調といった方がいいのですか、盛んではないと。平均値も低いのですよね。

何かありますか。いいですか。何かありますか、ティー先生。

○ティー・キャンヘーン委員 完全にこれは町内会とか、全部何もやっていないというこ

となので。納得してしまいました。

○吉野英岐部会長 納得してしまいましたか。

特に男性が下がっているのですよね。でも、これ岩手ならではの特徴として、地域社会とのつながりが非常に高い、いいことだということを書いてきたのだけれども、ここが少し下がっているということ自体は、やっぱり何か手を打つ必要性があると。では、どんな手を打てばいいのというときに、どこにどういうターゲットが入って。

○ティー・キャンヘーン委員 私の記憶、でもここにも書いてあるのですけれども、これは自治会、町内会の活動もさながら、実はこれだけではないという、地域のつながりとしては。すみません。スポーツ、趣味とかボランティアを今ちょっと分析していただきたいのですけれども。今のこの議論は、地縁的活動を何とかしなければいけないという結論になりそうなのですけれども、でも広い意味の地域のつながりであれば、多分このアンケートのもう一つあるスポーツ、趣味、娯楽活動とボランティア、NPO、市民活動というのがあるのです。そこを見ておかないと、多分もしかすれば変な方向に行きそうな気がして、すみませんが、もうちょっと何か追加して分析していただけないでしょうか。

○吉野英岐部会長 県民意識調査ね。

○ティー・キャンヘーン委員 はい、いただきたいです。すみません。

○山本調査統計課主査 今ティー委員からお話いただいたのが、その前に和川委員からもお話のあった意識調査のどの設問から集計しているかということになります。お手元、もしかするとないかもしれませんが、この調査の設問としては組立てが3項目ございまして、1つが今回集計している地縁的な活動、中身の例示として自治会、町内会、婦人会、老人会、青年団、子ども会と置いております。次の設問がスポーツ、趣味、娯楽

○吉野英岐部会長 今ティー先生が指摘された。

○山本調査統計課主査 はい。例示としては、各種スポーツ、芸術文化活動、生涯学習などで、もう一つがボランティア、NPO、市民活動という問いで、例示はまちづくり、高齢者、障害者福祉、子育て、スポーツ指導、美化、防犯・防災、環境、国際協力活動という形で質問したものでございます。その上で、調査はこのようにしてございまして、データはございますので、ちょっと時間をお借りすれば同じような形での集計は可能かと

○吉野英岐部会長 3本柱の1本しかまだやっていませんよ。

○和川央委員 すみません。私言おうかどうかずっと迷っていて、今の話に便乗するのですが、実は分野別実感が低下した要因の自治会、町内会活動というは2番目で、1番目は隣近所との面識、交流がずっと1番に来ているのです。なので、分析対象とすれば地縁的

な活動も重要なのですが、その前の近所付き合いの分析をするべきではないかと思って、先ほど質問したところですが。

○吉野英岐部会長 それは、項目があるのですか。

○和川央委員 ございます。

○吉野英岐部会長 県民意識調査に。

○ティー・キャンヘーン委員 第1回の参考資料にあります。第1回の参考資料、右の18と19ページにあるのです。

○吉野英岐部会長 項目としてはね。

○ティー・キャンヘーン委員 はい。18、19ページ見れば、どういう項目を聞いているかというのは分かります。

○吉野英岐部会長 はい、分かりますね。

そうすると、組織的な行動ではなくて、御近所との交流みたいなものがこの低下に効くのではないかと。低下を説明しているのではないかということですね。

○池田政策企画課特命課長 はい。前回お話あったソーシャルキャピタルの分類の問題と、あとはコロナの影響等を考えると、やっぱりこちらも少し目を向けた方がいいのかなという気はしております。

○吉野英岐部会長 4の1とかね。

○ティー・キャンヘーン委員 問4の1ですね。

○吉野英岐部会長 4の2もあるかもしれない。4の1でいけるか。

○和川央委員 5の1ですか。

○吉野英岐部会長 参考資料2の18ページ。違う資料でしたか。

○和川央委員 違う資料

○山田佳奈委員 去年まで。

○吉野英岐部会長 今年の1回目の。

○**ティー・キャンヘーン委員** そっち側。

○**山本調査統計課主査** 失礼します。年によって、設問番号は変わりますので。

○**吉野英岐部会長** はい、それは大丈夫です。

○**山本調査統計課主査** その点は御注意いただければ。

○**吉野英岐部会長** はい。ここがどういう結果になるかによっても、さっきの3本柱の活動だけではなくて、ここが落ちていると実感も落ちるのではないかと。隣の人が誰かは知らないというのがぼんと増えたりしたりすると、付き合いもないですみたいになってしまう話ですね。つながりなんていうのは、それは知らない人ばかりだとつくれないでしょうからね。これもやってもらいますか。

○**山本調査統計課主査** 今新しい集計作業について御指示幾つかいただきましたが、そのうちの1つ、地縁的な活動のほかにスポーツ、趣味、娯楽、あとボランティア、NPO、こちらの集計については今回お示ししたグラフの作り方と同じ集計でいけるので、作業できるかと思います。

もう一つお話しいただきました友人、知人との付き合いの関係については、ちょうど今各委員の皆様ちょっとどの設問かというお話あったようですが、設問が幾つかございます。どのようなお付き合いをされていますかというレベルの話とか、あとは付き合っている御近所の人数はどのぐらいですか、あとは友人、知人、御近所でなくて、友人、知人、親戚、親類ということで、頻度、設問、お手元の調査票をもし御覧いただければ御覧いただけるかと思いますが、幾つか設問があるので、もし可能でしたらどの部分で集計をしていくか、御指示いただけると大変助かります。

○**吉野英岐部会長** ということですが、和川委員、どうでしょう。

○**和川央委員** ちょっとティー委員にも御相談なのですが、できれば全体像を見たいなということを考えれば、ちょっと乱暴なのですが、付き合いを全くしていないはゼロ点、挨拶は1点とかという形で点数化をして、数量化した平均値で出すのはいかがかなと思うのですが、この辺りちょっと、すみません、ティー先生の御意見も伺いたいと思います。ちょっと乱暴な手法ではあるのですが、全体の傾向を見るという意味では使えるかなと思うのですが、いかがでしょうか。

○**吉野英岐部会長** 得点化するということね。

○**和川央委員** ええ。



○吉野英岐部会長 何かティー先生に質問ということなのですからけれども。特定の定めは、本当にそれで正しいかということですね。

○和川央委員 はい、そうです。

○吉野英岐部会長 得点化しない限り、ちょっと数字的には出せない。

○和川央委員 そうですね。

○吉野英岐部会長 できそう。

○ティー・キャンヘーン委員 グラフはすごく見やすく、何とかここでうまくできないかなど、確かに数値化もありですけれども。ちょっと今まだ整理できていない。

○吉野英岐部会長 本当。

○和川央委員 グラフ

○ティー・キャンヘーン委員 グラフ化はできないと思うのです。

○吉野英岐部会長 今質的な話になってしまっているから、量に転換しないと。

それはどういう方法で示すのが一番いいか、ちょっとティー委員、和川委員、御相談の上でやってほしいですけれども、確かに団体的な活動以外のところでも、この地域社会とのつながりに影響を与えているのではないかという仮説の下に、県民意識調査の中で該当する質問項目について分析していただきたいという方向性は一致していますので、それを見てからの方がより容易に新しい、補足調査で要因で挙げていらっしゃるのは、確かに団体活動というよりは御近所付き合い

はい、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員 私今資料2-②を見ているのですけれども、これはすごく見やすく、要するに経年変化も見られていいなと思っていて、例えば問4の1から4の3、これを100%にして、H29からR4それぞれ100%毎に試みて、どう変化したかというのを一回見てみてはどうかと思いました。

○吉野英岐部会長 そうすると、得点化しないでそのまま使えと。

○ティー・キャンヘーン委員 そうですね。総回答100%で選択肢は多分変わっていないはずなので。

○吉野英岐部会長 はい。

○**ティー・キャンヘーン委員** ひとまずそれがいいのかなと、ちょっと思いました。すみません。点数化すると、平均してしまうので、またちょっと見にくいのかなと。すみません。

○**吉野英岐部会長** はい。では、通してやるには、確かに選択肢毎に動きを見るということ。

では、つくりは同じでいいという、まず1回目がこの形なので、今資料2—②—2で作っていただいているような形式で、かつ。

○**ティー・キャンヘーン委員** 棒グラフで100%。

○**吉野英岐部会長** 棒で行くの。構成比。

○**ティー・キャンヘーン委員** はい。

○**吉野英岐部会長** 構成比の分か。

○**ティー・キャンヘーン委員** はい、そっちの方が見やすい。

○**吉野英岐部会長** 構成比と横並びみたいな。

○**ティー・キャンヘーン委員** そうです。

○**山本調査統計課主査** よろしいでしょうか。御指示いただいた集計2点のうち、スポーツ活動のボランティアについては、設問の構造自体が今回グラフでお示ししている地縁的な活動と同じなので、そちらはこの形で作れると思います。

あともう一つ、今日、先ほど新たに御指示のあった御近所とのつながりの関係は、ティー委員からお話あったように、こちらは回答がちょっと構造が違うので、おっしゃるとおり総回答を100%にした上で、構成比、縦棒グラフで経年変化のような形を工夫してみたいと思います。

○**ティー・キャンヘーン委員** よろしくお願いします。

○**吉野英岐部会長** いいですか。

ありがとうございます。

それには答えは出ないということですね。

○**ティー・キャンヘーン委員** ちょっと見たいです。すみません。

あれもこれも大変申し訳ないのですが、見たいものが増えてきました。すみませんでし

た。

**○吉野英岐部会長** 結局それは今回の資料2—②—2の低下した要因、2ページ目にある特徴的な属性は確認できないということで、まず1点押さえてあって、しかし回答はこうであったという、補足調査の回答は隣近所との面識や交流、あるいはいろいろな地縁的活動への参加、あるいは年数ということが挙げられていますよと。ただ、その後で特徴的な要因は抽出できないとまとめてはいますけれども、であれば推測されていると書いていて、もうちょっと踏み込んでみればどこが下げているのかが分かるのではないかとということで、そこがはっきりすればこの実感が低下している要因ももう少しはっきりしたことが書き込めると、そうした方が多分アクションプランを作るときにも何すればいいのだというときのバックグラウンドになるということで、やってみようということで、ちょっと御負担かけますけれども、よろしいですか、事務局は。やればやるほど宿題が増えていく。

竹村先生、今そういう議論にしていますけれども、よろしいですか。

**○竹村祥子委員** 年代別「地縁的活動」状況のグラフと、各広域圏別「地縁的活動」状況の年代別と同じ色にしていきたいということです。

**○谷藤邦基委員** グラフの色を統一してほしいという話だと思う。

**○吉野英岐部会長** 色ですか、先生。グラフの。

**○竹村祥子委員** はい。年代別「地縁的活動」状況では、60から69歳というのが紺色ですけれども、各広域圏別「地縁的活動」状況では緑色になっている。

**○谷藤邦基委員** だから、色自体が合っていないので、統一してほしいということです。

**○吉野英岐部会長** 分かりました。1ページ目と2ページ目が違うのですね。分かりました。

**○竹村祥子委員** それから、もう一つは、年代別「地縁的活動」で見たときに、60～69歳グラフが一番上で年齢が上がるにしたがって活動をしている割合が高いことが出ていたと思います。

**○吉野英岐部会長** そうですね。

**○竹村祥子委員** 29歳以下の「地縁的活動」の活動率が低いことは、広域圏別にみても、だいたい同じような傾向だと思います。今後は、選択できない「地縁的活動」の質問(近所づきあいや町内会活動)だけでなく、例えば「地域内で行えるスポーツ活動に参加しているか」といった選択縁(自分が選んで参加できる草野球チームなど)の地域活動参加についての質問文も入れることを検討しても良いと思いました。

○吉野英岐部会長 先生、何か突然先生の声が小さくなってしまって、今スピーカーからさらにマイクを入れて皆さんに届けてはいるのですが、全体でちょっと声がよく通ってなくて、分かるところは分かったので、前半部分は特に聞き取れましたので、色の問題と、それから年代別は各地域の共通して行って、年齢が上がるにしたがって活動自体は、あるいは高い方まで行っているというというのは共通ですよというお話だったと思います。だから、中身で言えば年取ればみんな動くようになるのだから、いいのかもしれないけれども、年取っても動かないようになってきたら今後どうなるのかというのはちょっと心配で、加齢によって活動が増えるというのは、今まではそうだったのかないけれども、そうではないところでもし出てくるとすれば、やっぱりそれは注意しなければいけないかなとも感じました。ありがとうございます。

何ですかね。先生、ちょっとマイクの近くですと、一回しゃべってもらえますか。竹村先生。

○竹村祥子委員 聞こえますか。

○吉野英岐部会長 あまり変わらない。向こうの機器の問題ではない。

○佐々木政策企画課主事 こっちは結構音量を

○吉野英岐部会長 いっぱいいっぱいになっている。

○竹村祥子委員 どうですか。

○吉野英岐部会長 少しよくなったと思う。

では、このままもう一回続けてみます。ありがとうございます。

では、ちょっと地域とのつながりについては、ほかの活動あるいは御近所との付き合いについてちょっとデータ増やして、分析増やしてみましよう。

地域の安全ですか、今度は。はい、どうぞ。

○池田政策企画課特命課長 地域の安全でございます。こちらの方につきましても、実感平均値といたしましては3.72点から、基準年より0.10点低下しており、この分野別の実感としては低下と判断してございます。

有意な変化があった属性といたしましては、表4のところにお示ししておりまして、このような範囲で出てございます。

分野別実感、補足調査の結果から分野別実感が低下した要因というのを推測したところといたしましては、自然災害の発生状況、自然災害に対する予防、犯罪の発生状況というような要因が出てきているというものでございます。

前回の御議論の中では、1つは分野別の実感としてがくっと落ちたところがあるのではないかというようなお話がございましたり、あとは年齢別のところでの推移を把握したり

というところ、あともう一つは調査時期等々の関係もございまして、いわゆる雪害のような影響があつて、こういったような結果という部分が出てきているのではないかというようなお話もございましたので、今回資料の方を整理させていただきまして、圏域別と年代別というような整理をさせていただいているというところでございます。

それが資料2—③—2ということになります。前回の御議論の中では、雪害というのは、調査時期、1月にやっているということもあつて、実感として出てきているのではないかということで、そうすると雪の少ない沿岸はより実感が高いのではないかというお話もちょっとあつたのですが、今回の資料を御覧いただきますと、基本的には実感がいいのは県央地域が実感としては高く出ていて、沿岸としては実感が低く出ているという状態になりますし、実感として感じないと答えた方々の分布状況を見ても、感じないという方の割合としてはやはり沿岸部が高いというような傾向が出ていますので、雪害としての説明は一概にはちょっとなかなか難しいような状況であるのかなと考えてございます。

次のページを御覧いただきまして、年代別でお示しをさせていただきます。年代別のものということになるのですが、基本的には今年については30代が一番高くなっているのですが、平均的には割と40代の方が高めに出ているのかなと考えております。

感じないという声につきましても、今年は割と20代が高めに出ているというような状況にあつて、70代、高齢の方が実感があるというお話もありましたが、割と感じない方も少なめで、感じるという人も少ないのですけれども、そういうような形になって出てきているということになります。

その次のところにつきましても、圏域別の状況ということでお示しをさせていただきます。割と狭い範囲の中で皆さん集まっているというような形にはなっているのかなと思っております。20代のR4については県央なんかだとぐっと上がっているのは、ちょっと理由は分からないのですが、そのような状況になっていますし、県南地域といたしましては、60代が実感としては高いという傾向にございます。沿岸としては、やはり30代が高く出ていますし、県北については40代、30代が高いというような状況になっているというものでございます。

前回、補足調査の方の実感の推移も把握したいという御意見を頂戴してございますので、そちらの方も併せてつけさせていただきます。こちらの方は、補足調査ということになります。話題となった70代とかのところについては、割と実感がほかの年代に比べても高めに推移しているということがございます。振興圏別ということで見ますと、割と沿岸も、県北よりも高い状態で推移しているということになっていて、ちょっと一概にここから何かというと、すみません、ちょっと私どもの方では整理できませんでしたので、今回御議論の中で様々御意見を頂戴できればなと思っております。

最後に、資料2—③—3ということで、補足調査の方で実感の分布を平成31年度、R4で比較をしてみた資料を御用意してございます。これを見る限りにおいては、ちょっと大きくぐっと実感が落ちた人が多かったというような説明は、この資料上はちょっとなかなか難しいのかなというような感触を持っているというところでございます。

御審議の方、よろしく願いいたします。

**○吉野英岐部会長** 地域の安全についての分析を深めていただきました。これについて、

御質問、御意見、お願いしたいと思います。

上がったり下がったりするというのはどうしてかというのが前回の議論だったと思います。地域別で見ると、多少県北が低いけれどもというぐらいで、雪害までは言い切れないと。沿岸が低いと。あとは、動きですね。感じる人がどう動いたかというのは、一番最後の補足で出てきています。数字としてはこうなので、分野別実感が低下した要因として最後に書くこととして、1ページ目に戻りますけれども、以上を踏まえ、ここの分野の実感が低下した要因は、自然災害の発生状況、自然災害に対する予防、犯罪の発生状況であると推測されますとまとめられていますので、このまとめでよろしいかどうか。

はい、どうぞ。

**○和川央委員** 質問させてください。

今補足調査における実感についてということで、R2からR4の属性別の補足調査の平均値が出ているのですが、平成31年はないのですか。

**○ティー・キャンヘーン委員** 入れてほしいですね。可処分所得以外は多分作れる。

**○和川央委員** そうですね。それがあるとよろしいと思います。

**○池田政策企画課特命課長** お話のとおり、県民意識調査のデータなので、その中で、背景で作らせていただきたいと思います。

**○和川央委員** ちなみに、ここの平均はすぐ出てきますか。H31の平均値は、すぐにいいです、失礼しました。結構です。ありがとうございます。

**○吉野英岐部会長** 補足調査だから、R1もあるのですか。

**○池田政策企画課特命課長** R1のときは県民意識調査の中で答えた方から選抜しているので、回答としてはございます。ただ、今お話にあったとおり可処分所得は県民意識調査の中にはないので、実感平均値としては出てこないということになります。

**○吉野英岐部会長** あるのとなないのもあって、ここはあるということですか。ピックアップすれば出せるという。

あとは、下がっていると言えば下がっている。自然災害の発生状況をどうコントロールするかというのは難しいですね。台風来ないようにするとか、水害というか、水をそもそも減らすとかというのはちょっと難しいので、政策的な対応としてはやはり被害を軽減、低減できるような備えが十分にできているかということですかね。

はい、どうぞ。

**○池田政策企画課特命課長** そのところについては、去年の解釈というか、ここのところの表現としては、多分一般的な部分が去年の方は多かったですので、自然災害の発生が多

く、被害が大きくなっていることということで、年々そういった自然災害の発生が多くなってきていて、被害も大きくなってきているのではないかとということで、こちらの方の整理をさせていただいているので、そういったようなイメージなのかなと思っています。令和元年があって実感が落ちたところとか、そういったところを踏まえつつということになるかと思います。

**○吉野英岐部会長** 自然災害の大規模化に予防や対策が十分に追いついていないのではないかとということ。

**○池田政策企画課特命課長** 追いついていないというか、それに対して不安が多分、災害というのが大きくなってきたり、頻発してきているということに対しての不安があるということかと思っていて、今ある対策が十分でないとか、十分であるとかというところがちょっと踏み込んでいかどうかは、部会の中の御議論の中なのかなとは思っております。

**○吉野英岐部会長** 予防を挙げている人も多いのですよね。2番手だけれども。県庁としては、いろんな災害に対する備えは着実にやりになってきたと思うが、実感がなかなか得られていないのではないかと。

**○池田政策企画課特命課長** はい。

**○吉野英岐部会長** むやみに安全ですよと言うのはちょっと難しいけれども、過度な不安感を与えないような情報の出し方も含めてでしょうか。もちろん物理的な対策もあるけれども、情報の出し方や避難の認識なんかも高めることで、大規模な災害に備える体制がちゃんとあるから、しっかり行動していただければ大丈夫だよというメッセージを出せるかどうかですね。

はい、どうぞ。山田委員。

**○山田佳奈委員** 2点ありまして、1つは前回資料でしょうか、このファイリングしていただいている細かな方ですけれども、資料6—2ですか、それぞれの分野別実感の変化別ということで、赤ラベルの地域の安全の一番最初のところをちょっともう一回振り返りますと、③、実感が低下した人の回答の下に、上位3項目はここにピックアップしていただいたとおりなのですが、これは実感が上昇した人、横ばいの人と比べると、ちょっと割合が高い、相対的に高く。母数が小さいので、ちょっと言いにくいのですが、やっぱりちょっと高く出ているのが気になっております。基本的には、書き方として3項目で統一されているところはありますけれども、これは実感の低下のところ、やはりこれは安全のところですので、ただし、こうした意見もありますというのは、これは入れてもいいのではないかと、ちょっとイレギュラーになってしまうかもしれませんが、と思いましたが、いかがでしょうかということと、あとすみません、この文章はこれから多分精査していただくものかと思いますが、本日資料の資料2—③—1のこの中の分野別実感が低下した要因の回

答理由 2つ目のポツのところ、実感が低下した人の回答理由は以下のとおりでしたという、多分ここはこれから文字を変えて精査していただくかと思うのですが、例えば昨年ですと主な回答項目は以下のとおりでしたということになっていて、これだけかもしれないのですが、もうはっきりと上位3項目は次のとおりでしたと書いてしまっているのではないかなという気がしておりました。その方が、ほかの理由もあるのだけれどもという。以上、構成2点です。

**○吉野英岐部会長** 事務局、いかがでしょうか。

**○池田政策企画課特命課長** まず1つ、記載の方につきましては、お話のとおり、上位3項目から書くことについてはそれでよろしいかなと思っています。

あと、今お話しになられた上で、多分前回も同じお話をたしか頂戴をしていたかと思うのですが、ここの解釈をどうするのがいいのかなという部分ですが、個人的にはお話のとおり、ここの部分、顕著に出てきているなという思いはあるのですが、そこを要因として追加するのか、もしくはほかの要因を削ってこれを入れるのかどうなのかというのは、ちょっとこちら側としてどう判断したらいいのかなというのが正直なところですが。ただ、要因としては、ファクターとして大きいだろうなという印象は抱いていると。ちょっと感想的なものになってしまったのですが、そこら辺の分析の御意見をぜひ委員の皆様から、この手法でいいのか悪いのかということについては御意見をいただければと考えています。

**○吉野英岐部会長** 球が返ってきましたけれども。

では、ティー委員。

**○ティー・キャンヘーン委員** これも若菜委員が言った話のような気がするのですがけれども、顕著に実感が上昇した回答と横ばいの回答とを比べて、これは低下なので、低下の中でやはりそういう割合がすごく大きく違うというのであれば特記、要するに特別に書くべきではないかという話の一つはあるかなと思うのですが、何となくそう思っていないかも。ちょっと話変わって、要するに想定した以上の災害が最近多く起きているので、でもどこにも書いて。感想なのですが、想定以上に災害が起きて、これぐらいかなと思ったら倍来たというのがあったり、それはやはりこれにつながるかなと思って、さらにもう一つがころころ発信の仕方が変わっている。要するに、レベルがこっちから変わりましたとよく言われるではないですか。要するに、避難の

**○吉野英岐部会長** 避難指示とか、避難命令とか、あるいは勧告とか何かカテゴリーがあって。

**○ティー・キャンヘーン委員** ああいうのでかころころ変えられたら、それは個人的に僕は思うのですが、それは感想なので、これにつながっているのかなというのものもあるのかなと思いました。



○吉野英岐部会長 山田先生。

○山田佳奈委員 すみません。今ティー委員さんがおっしゃったように、前回私も若菜委員さんがおっしゃったことを思い出しつつ、お話しさせていただいたような記憶があります。今ティー委員がおっしゃったのは、こうした社会インフラの老朽化ということが、これが自然災害の発生に伴い、想定以上の大きな被害をもたらすのではないかという、そういう仮説ですか。

○ティー・キャンヘーン委員 いや、違います。ちょっと一旦その話は置いて、今の状況、今の私たちの生活する状況を見ていると、結構想定した以上の災害が起きているのです。それが自分の地域は安全なのかと考えたときに、ちょっと違うかなと思われたかなと。プラス情報の発信の方はころころ変わっているので、それがここで言う災害に対する行政、防災対応、情報発信と、これは行政側の問題であって、これは国が決めたことであって、これも覚えていられない、覚えられないしというのものもあるのかなと、つながっている、推測の域しか出ないのですけれども、それもあるかなとちょっと思いました。話がつながらない、別の話。

○山田佳奈委員 了解しました。すみません。

○吉野英岐部会長 では、和川委員。

○和川央委員 今のお話、私も感想一つとご指摘を一つしたいと思います。

まず、私も今のティー委員と山田委員のお話聞いていて、そうかなと思っていまして、上昇した人と低下した人の回答が著しく違うというのは、多分見ているものが違うのだと思います。社会インフラというのは、上昇した人はあまりそれを気にしていないのだけれども、低下した人はそれを気にしているというところです。逆に自然災害の発生状況というのは、高い人も重視しているのです。なので、多分これは見ているものは同じなのだけれども、感じ方が違うということなのだろうと思います。そういった意味で、発生状況そのものではなくて、そこから付随する、先ほどティー先生がおっしゃった、そこでまた差が出てくるところは多分該当するのだろうなという、この9番とか10番は下がるので、そういったものが間接的に影響しているのではないかという解釈は、僕もあり得るかなと聞いていました。

2つ目は、先ほど山田委員からの指摘に対する私の意見なのですが、分野別実感が低下した要因の2ポツ目、「実感が低下した人の回答理由」と書くと、補足調査で実感が低下した理由を聞いているような誤解を招くと思っています。前回までのレポートでは結構そこをくどく書いていたのは、そのような誤解を招かないようにしようとする配慮があったかなと思います。したがって、直すときにもその辺りを、誤解を招かないような直し方にさせていただければと思います。

○吉野英岐部会長 いかがですか。

○池田政策企画課特命課長 私もそう思って、しまったなと思っていました。

○吉野英岐部会長 では、そこは慎重な書き方をすると。  
もう一点。

○山田佳奈委員 何度もすみません。ティー委員がおっしゃったことは、よく分かりました。おっしゃるとおりだと思います。

それで、ここはそれこそこの部会のスタンスというところに関わると思っていて、これまでは確かに上位3項目ということでやってきたかと思えますけれども、これが今、特に安全のところでは若干独り歩きする、この3項目が独り歩きするというのがちょっと怖いという気もしていました。つまりこれ以外の要素というのが出てこなくなり、ほかのところ、つまり本分析部会のレポートの中でよく見れば出てくる、だけれども分析の結果としてはこの3点だと思われまうというの、ちょっと怖いというのがありました。少しほかとのバランスを、今ティー委員がおっしゃったことと含めて、補足はしてもいいのではないかなと。実感が低下した方ということについて思いました。感想です。

○吉野英岐部会長 ありがとうございます。

上位3項目は一応残すことにしていくけれども、冒頭に山田先生からお話のあった実感が上昇している人と低下している人、変わらない人で大きな差がついているインフラの整備でしたか、老朽化か、なんていう項目も、やっぱりこれだけ差がついているということは、感じ方が違うということで、基本はこういうのも特記というか、大きく差がついてときは入れてみて、こういった要因もやっぱりあるのではないかということを入れることで、上の3つだけに要因として説明できるものばかりではないですよということを示すのはいいのではないかなと思いました。

それから、実はたまたま昨日盛岡広域圏の経営会議とあって、アクションプランをつくる会議に参加させていただいたときに、盛岡の振興局土木部さんから危険地域に対する基礎調査というのを県ではやっている。危険地域というのは、傾斜角30度以上、要するに地滑りなんか起きそうなところをピックアップして、この地域か何かの、それで190か所だったと思っていますけれども、実はもう全部終わっていますと言うのです。令和3年でもう目標値は達成しましたと。それで、もう今2巡目に入っていますと。だから、もう行政的に見れば十分調査もやっているし、さらに重点的に2巡目に入っているということがお示しされたのですが、委員の中から、そういったところを選んでいる基準が本当に正しいのかということ、それから調査自体が適切な調査方法を取っているのか。つまりそういうことによって安全性が確保できるという結果もたらしうような調査になっているのかがどうなのだという話をされて、ちょっとそれは精査しますということがあったけれども、例えば、こういったことを政策レベルに落としたときに、では危険箇所をちゃんと見て、調査を期日までに何か所以上やるのだという目標を立てて一生懸命現場を頑張っているけれども、そもそもそれで安全性が確保できたと実感されるのかと言われると、確かにこのとおり、特に高齢者なんかはちょっと実感が下がっているのを見ると、調査され

ているといっても、それは何か安全になったというところに追いつかないみたいなことをちょっと昨日現場レベルの頑張り方と、やっぱり最終的な県民の皆さんの安全性に対する実感のキープというものがやっぱりなかなか一致しないなど。だけれども、政策レベルによって、やっぱり何を何箇所やったというような出し方にどうしてもならざるを得なくて、もう目標値なんか、簡単に言えばもうクリア状態でした。むしろもう2巡目、安全性をもっと高めようとして頑張っていますという話で、どっちも悪くないのだけれども、そこに何かちょっとずれがあるような気がします。やっぱりこういうふうに自然災害多くなったところで、調査を何か所やるというよりも、安全性を高めることが実感できるような調査とは何なのかと。それを情報としてどう出していくのかと。何箇所やるかは誰も知らない話ですと、会議に出なければ分からない話なのですけれども、それが県民にまで伝わっていくような仕組みをつくることによって、実感レベルを少しキープしたり、それをしないと今やっぱり自然災害が頻発、しかも大規模化しているというのが全国的に言えるので、やっぱりそれを放っておくわけにはいかないという時期に来ていると思います。やっぱり効果的な安全性を高める施策というのを各事業所というか、現場レベルでもお伝えして、考えていただくというのも大事ななところとすごく感じるところです。

部長さんは何でも知っているから、大丈夫だと思いますけれども。

**○小野政策企画部長** まさにロジックモデルといいますか、あるいはアウトプットというところかと思うのですが、盛岡広域の方でつくった地域振興プランの進捗状況、今議論されたと思うのですが、言ってみれば4年前につくった計画がそもそもございますので、その段階での目標値、検査をする箇所ということだと思います。ですから、その当時の設定がそのまま今の段階でいいのかどうかという議論も含めて、やっぱり2巡目、僕もちょっと詳細を見てみないと何とも言えないところがあるのですけれども、やはりそれによって県民の皆さんが最終的に安全と感じ、実際に安全な状況にあるといったところが重要だと思いますので、そこはどうしても現場レベルになりますと、目先の事業をこなすといったところがまずはといったところで出てくると、そういう政策、私どもの方の政策企画、計画をつくって評価をして、それを具体的に進めていく部署でございますので、やっぱりそこまで見ていかなければいけないかなと。まさにこちらの分析部会のところは、それが県民まで必ずしも届いていないよということが一つ言えるのかなと思っておりまして、そこは山田先生お話しのように、3つに関わる、大きくネガティブな評価された方とポジティブな評価されたところでその要因が違っていると、大きく異なっているところがあるとすれば、やっぱりそれは注目する必要があるのかなと思っておりまして、3点にかかわらず、今度御指摘をいただいて、何らかの形でのせていった方が私もいいのではないかなと考えております。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございます。

**○竹村祥子委員** すみません。1点だけよろしいでしょうか。

**○吉野英岐部会長** 竹村先生、先に行きましょう。

はい、どうぞ。すごく声よくなりました。すごく声がさっきの5倍ぐらいよくなりました。

○**竹村祥子委員** すみません。ちょっとビデオの方を消して試してみます。アップロードの問題かもしれないので。

○**吉野英岐部会長** 今一番いいですよ。

○**竹村祥子委員** どうですか、声の方。

○**吉野英岐部会長** すごくいいです。先生、顔映しても大丈夫ですよ。

○**竹村祥子委員** アップロードの問題かもしれないので、ちょっとこのまま話させてください。

表示の件です。すみません、スケールと色を合わせてください。よろしくお願いします。

平成28年から令和4年まで地域の安全ということからすると、沿岸地域というのは常に安全を感じないというところがずっと他の広域圏に比べて高く出ているので、「安全だと感じ取れるような施策を考えてみる必要がある」ということも入れておいた方がいいと思いました。沿岸地域は際立って「感じない」の方のグラフが常に上にあるということ指摘しておいた方がいいと思いました。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。

確かに地域振興計画の中で取り入れてもらえるとありがたいのですよね。実感が低いので、他地域に比べるとやっぱり低いということなので、より安全性を感じられるような仕組みづくりをあと4年間でぜひやってもらってということですかね。ありがとうございます。

はい、どうぞ。

○**小野政策企画部長** 沿岸広域圏の方の地域振興プランの方に、県民計画の中で、御承知のとおり復興推進プランというものもございます。安全の確保、その中でやっぱり最近ですと、このデータには反映されていないと思いますけれども、国の方の新たな浸水域、あの関係もございまして、県、市町村の方で、各沿岸の市町村の方で住民の皆さんに説明をしていることによって、いわゆるR2ですか、最大規模の次のところで今の防潮堤は造っているわけですけれども

○**吉野英岐部会長** L2。

○**小野政策企画部長** ごめんなさい。L2です。それを言ってみれば超えるといった想定が今回出されていて、そうすると防潮堤を前提とするのはちょっと違っているのではないかというような議論も様々あるものですから、それに伴って避難、そういったものについ

でも新たな計画を策定しましょうという段階になっています。ですので、やっぱりそこについてはどんどん全体が変わってくれば避難計画とかも更新しなければいけないということもありますので、その辺について復興推進プランの中でもしっかりと、あるいは国土強靱化推進計画というものが岩手県もございますので、その中に最悪の想定、それを更新して、それであればどういった取組が必要かといったものについてもさらにアップデートをかけていくというようなことになるとと思います。

○吉野英岐部会長 よろしくお願ひします。

では、谷藤委員、どうぞ。

○谷藤邦基委員 1点だけテクニカルな御指摘させていただきます。指摘というか、要は前回の資料の資料6—2の地域の安全のところの表を見たときに、実感が上昇したという人が137人いて、低下したという人が79人しかいないのに、何でこうやって数値下がるのでしょうかというのを言ったと思うのですが、その疑問は今回出していただいた資料1で解消しました。

資料2—③—3、これは前回は全部ついていたと思うのです、最初から。今回もこれ最初からつけておいていただければ、そういうことだったのかということは分かったと思うのです。要するに平成31年に感じると5をつけていた人が今回令和4年でどう評価したかというのがその表ですけれども、69のところ、感じるからやや感じるに低下した人、5から4になった人、これは実感が低下した人には含まれていないのです。1段階のときは入れないというのは、確かに前回からそうやっているのです、この部分はだから数値計算上は5だったものが4になっているから下がっているわけですね。それが原因だったのだというのは、この表を出していただいて、本当に分かりました。できればですけれども、これを最初からつけておいていただくとよかったかなとは今思っています。

以上です。

○吉野英岐部会長 ほかの分野にも。

ティー委員、どうぞ。

○ティー・キャンヘーン委員 この分野に関しては、よくある話として、私も本とか読んだときに、これハード面幾らやったら無理があるのですね、お金とかの面で。これは、どっちかというソフト面でいかに浸透していくかというので変わってくるのではないかなとちょっと思いました。幾ら造っても、さっき言う通り防波堤だって、では

○吉野英岐部会長 もっと高くしますかといったって。

○ティー・キャンヘーン委員 幾らかかるのですか。

○吉野英岐部会長 もう造ってしまった。

○**ティー・キャンヘーン委員** 多分できるのではないですか、やろうと思えば。

○**吉野英岐部会長** お金があれば。

○**竹澤政策企画課総括課長** やはり防災の関係はハードとソフトの組合せで進めていかなければならないというふうな計画で、そういう考え方で進めておりますので。ありがとうございます。

○**吉野英岐部会長** あと住民参加とか、幾ら供給側がいい情報を出しても、住民側が関心を持っていただけないとかになってしまっただけはあまり、避難訓練も全然人が増えないとかということもあるから、どうやったら住民の方々が参加して、我が事として思っただかくかと、ソフト面の一つではありますけれども、そこもすごく大事ですし、それがあつことでやっぱり安全性の実感も高まる可能性もあるのではないかなと思います。そこは、ではしっかり。

○**竹澤政策企画課総括課長** あと、山田委員から御指摘のありましたインフラの老朽化の話なのですが、これについては全国的に、岩手県でも課題だと認識しておりましたので、今回こっちの方に盛り込んでいただけるというのは、行政としてもありがたいかなとは思っております。

○**吉野英岐部会長** 何か県営住宅も大分老朽化してきて、治安上の問題もないわけではない。いっぱい建てましたので、岩脇とか、緑が丘なんかはそうですね。そういったこともありますので、老朽化はいずれ直面するでしょうけれども。

ありがとうございます。

いいですか、事務局、先へ行って。

では、仕事のやりがい、やりましようね。では、ここの説明聞きます。

○**池田政策企画課特命課長** 仕事のやりがいでございます。こちらの方につきましては、実感平均値 3.41 点ということで、基準年より 0.12 点下がっておりまして、全体として低下と判断をしているところでございます。

今回仕事のやりがいの実感において有意な変化があつた属性ということにつきましては、表 5 のところでお示しをしているというところでございます。

それを踏まえまして、分野別実感が低下した要因というのを補足調査で把握している回答理由から選びまして、上位 3 位のところまでということになりますと、4 つ要因がございまして、1 つが現在の収入・給料の額、現在の職種・業務の内容、将来の収入・給料の額の見込み、職場の人間関係というのが理由として整理をされていたというところでございます。

こちらの方につきましては、前回様々御議論をいただきまして、1 つはやはり 20 代のところが結構下がっているということが 1 つの課題ではないかというお話は頂戴しているということ。あとは、収入と実感のクロスを見たいというようなオーダーを頂戴していると

ということ。あとは、無職の方が結構入っているということについて、留意する必要があるのではないかなというようにお話を頂戴してございました。

それらを踏まえまして、今回資料の方を御用意させていただいております。2—④—2ということで、補足調査の方で収入を把握してございますので、補足調査の実感平均値のクロス集計をお出ししています。1 ページ目の下の方、一番下のところに可処分所得と実感のクロス集計をお出ししております。こちら御覧いただくと、1,500 万円以上だけ特殊な動きをしていますが、基本的には所得が増えれば実感も増えていくというような動向になっているということになります。特にも 500 万円以上の所得がある方については、実感平均値としては大体 4 点を超えてくるなというようなことが見受けられるということでございます。

それに併せまして、すみません、ちょっとこちらも平成 31 年はないのですが、補足調査における実感の推移ということで、仕事のやりがいの補足調査の過去、R 2 から R 4 の実感平均値の推移を見てみると、先ほどお話ししたとおり、基本的には給与所得が増えれば実感も増えていくということと、500 万円以上になると大体 4 点を超えてくるというような結果が得られているということが分かったというものでございます。

また、先ほどお話ししましたとおり、無職の方が入っているということなので、勤労属性だけに限ってデータを出してみました。勤労属性に限ったというのは、専業主婦の方ですとか、学生の方とか、無職の方というのを、それを除いて理由の再整理をするとどうなるかというのが資料 2—④—3 になります。こちらを御覧いただきますと、1 の現在の職種・業務の内容ですとか、現在の収入・給料の額というのは前回と同じなのですが、職業形態（正規・非正規など）というところで、こちらの方が新しく見えてきた要因ということになってございますので、こうしたものの取扱いについても御審議をいただければと考えているところでございます。

私の方からは以上です。

**○吉野英岐部会長** 2—④—3、今最後に述べたところが新しい情報提供ということもあります。

では、ここについて、要因分析も含めていかがでしょうか。

ティー委員。

**○ティー・キャンヘーン委員** すみません。ちょっとまだ読み切れていないのですが、2—④—3 の実感が横ばいの人の回答のところ、これは 10 ですね。職場の人間関係となるのでよろしいですか。

**○池田政策企画課特命課長** はい、すみません。5 となっているところ。

**○谷藤邦基委員** 同じのが 2 つになっている。

**○吉野英岐部会長** 勤労、形態別というの、最後に説明された 2—④—3 でいいのでしょうか。

○池田政策企画課特命課長 2—④—3のところに勤労属性に限ると入れさせていただいていますが

○吉野英岐部会長 もう限ってしまっているから。

○池田政策企画課特命課長 限ってしまって。すみません、ちょっと先ほど御指摘のとおり、最後のは式を個別に入れていたのが残ってしまったということで。

○吉野英岐部会長 つまりこの勤労属性に限ってみて新たに分かったことは。

○池田政策企画課特命課長 新たに分かったのは、職業形態、いわゆる正規、非正規ということをやっぴり実感が低下された方が気にしているということで、考えられるとすれば当然非正規でいらっしゃった方が、いまだに例えば働く時間、場所が減っているという実感の低下ですとか、あとは正規だった方が非正規になってとか、そういった様々な要因が考えられますけれども、そういった形態そのものが働いている方々のやりがいの低下にも大きく関与していると見られるのではないかという。

○吉野英岐部会長 3番、上から3個目の緑の棒のことですか。就業形態（正規・非正規など）と。

○池田政策企画課特命課長 はい、そうです。

○吉野英岐部会長 その棒が結構実感が低下した人のところを見ると、39.3ポイントありますよと。これがほかの項目に比べても結構高いというか、現在の職種・業務の内容に次いで高いぐらいですよということから、やはりこういう就業形態が実感の低下と関連性があるのではないかということが新たに分かったことですよということでもいいかな。

○池田政策企画課特命課長 はい。

○吉野英岐部会長 お金の問題だけ。これはお金の問題もかなり近い、あるいは安定性ですかね。両方入るかな。

これは書き込みますか。書き込まないの、レポートには。書き込める。

○池田政策企画課特命課長 私の思いとしては、全体として前のお話もあったとおり、無職の方が入っている要因で全体を整理してよいのか、それとも仕事にやりがいというこの問いの特性上、やはり実際働いている方々の理由の中から要因分析をしていく方がより妥当なのではないかと考えてございます。

○吉野英岐部会長 そうですね。



谷藤委員、どうでしょうか。

**○谷藤邦基委員** これは、書き方に依存するところはあると思うのですが、新しい知見だと思うので、書き込むべきだと思います。ちょっと書き方をどうするかというのは別な問題ですけれども。

**○吉野英岐部会長** 勤労属性に限った

**○谷藤邦基委員** 勤労属性に限ると、少なくとも3番目の項目として浮上してくるわけなので、しかも実数で見ても53の方が回答しているということであれば、実感が上昇した人の回答も職場の人間関係とほぼほぼ同じぐらいの数字、実数ですね、割合でなくて、と思うと、これを無視するというのは、逆によくはないかなと思います。いずれこれは何かの形で書き込んでおくべきではないかなと思います。

**○吉野英岐部会長** ということは、勤労属性に限った分析結果を載せた方がいいと。

**○谷藤邦基委員** 注意書きみたいになるのか、補足みたいな形になるのか、でもいずれ情報としては載せておく必要があるだろうと思います。

**○吉野英岐部会長** 確かに原理的に考えて、無職の人に仕事のやりがいを聞くというのはね。聞けないわけではないけれども、答える方も答えにくいですよ。

**○谷藤邦基委員** どういう観点で答えるかがよく分からないのですよね。

**○吉野英岐部会長** 俺に聞くかという感じですよ。だから、むしろそこ整合性合わせるのであれば、やっぱり仕事している方々にやりがいを聞いているという方がイメージとしてはつながる。

**○谷藤邦基委員** 現実に、有意な変化があった属性として、例えば60歳以上の無職というのが出てきているわけですよ。こういった人たちの意見が入っているのという、当然そうになっているはずですが、そういう受け止めもあるわけで、では働いている人だけならどうなのだろうというのは自然に抱く疑問だと思うのです。それで分析してみると、要因としてある反応が出てきましたというのであれば、それはやはり書き込むべきではないかと思います。

**○吉野英岐部会長** ありがとうございます。

オブザーバーの広井委員からは、何か御意見あったとかでしたか、ここは。

**○池田政策企画課特命課長** 御意見というか、興味をお持ちになられていて、このところでコロナの影響で正規から非正規になった方がいっぱいいて、こういう実感が出たので

すかという御意見を頂戴いたしましたので、そこまではちょっと我々の方では把握はできませんということで、ただ先ほどお話ししたように、実際確かに正規から非正規になられた方もいらっしゃるれば、非正規でそのまま

○吉野英岐部会長 ずっとの人もいる。

○池田政策企画課特命課長 ええ。実感としてより下がった方もいらっしゃると思いますということで、ご理解いただいたと思います。

○吉野英岐部会長 では、ここは追加分析で入れる方向でよろしいですか。  
山田委員、どうぞ。

○山田佳奈委員 もう一つ、せっかく追加分析していただいたのでということで、全数の比較を見てました。項目で行きますと、7番の収入・給料以外の待遇、処遇（休暇・手当など）という、これ多分最近ちょっと変わってきているのかなという気がしています。若菜委員視点と言いますか

○吉野英岐部会長 横で比較すると、棒がでかいので。

○山田佳奈委員 ちょっとここがやっぱり違う動きを、全数ともちょっと違う動きをしているので、このグラフは大変貴重ではないかなと思って見ました。ということで、7について言及するのはいかがでしょうかということです。

○吉野英岐部会長 その特記事項。

○山田佳奈委員 特記事項で。

○吉野英岐部会長 これ具体的にどういうことでしたか。収入・給料以外の待遇・処遇。

○山田佳奈委員 休暇が

○和川央委員 育休取りやすいとか、そういう

○池田政策企画課特命課長 休暇が取りやすい。

○吉野英岐部会長 取りやすいとか。

○池田政策企画課特命課長 ちゃんと確保されているとか、あとは様々な手当、そのところがちゃんと見込まれている

○吉野英岐部会長 手当というのは、収入に入らないの。

○池田政策企画課特命課長 制度的なところでの整備かなと思います。

○吉野英岐部会長 休暇というのは、例えばお子様を持っている世代の人が子供さんのいろんな状況でちょっと仕事を抜けたり、短時間にしたりということが非常にやりづらいというようなことが続けば、給料はちゃんともらっていますけれども、非常にそこ辺りの調整が難しいということも想定していいということ。

○池田政策企画課特命課長 育児とか介護とかそういったもの、様々

○吉野英岐部会長 その仕事のフレキシビリティがちょっと低い人たちは、やっぱりやりがいを実感できないのではないかという流れ。

○池田政策企画課特命課長 はい。

○吉野英岐部会長 だったら、すごくいいという人も増えてもいいのではないかなと思うけれども、そうはならないのですね。全般的に低いのですか。

谷藤委員。

○谷藤邦基委員 この7番の項目は、そういう恩恵を受けている人は気にならないのです。それが当たり前だと思っているので。例えば今はなくなりましたが、昔公立学校の先生は眼鏡手当とか、そんなのがあったのです。

○吉野英岐部会長 ありました、私も。

○谷藤邦基委員 だから、ちょっとこの先は控えますけれども、いずれそういう恩恵を受けている人たちはあまり気にならないもの、FRINGE BENEFITなんて言ったりしますが、そこは例えば就活なんかのときに見る初任給幾らということでは分からない世界が結構あって、結構退職金がない民間企業はごく普通にありますし、あと例えば年金とかでも厚生年金かけている会社が普通だと思いますけれども、それに加えていい企業であれば企業年金という、独自のいわゆる3階建ての3階部分まで準備されていたりするので。

ですから、そういう話は、自分が知らなくても、例えば友達と話をしているときに、おまえの会社はそうなのだというのがいろいろ情報としては入ってくるのです。ですから、そういったことが多分影響していて、ない方の人たちはそこが気になると、多分。ある方は、それが当たり前だと思っている。だから、あまり気にならない。そういうことだと思います。

○吉野英岐部会長 和川委員。

**○和川央委員** 私も実はずっと気になっていまして、将来の給与よりも現在の処遇、待遇を重視しているのだなというのが気になりました。将来給料が上がるかどうか、という「将来給料の見込み」との回答者 14.8%よりも、処遇、待遇の方が割合が高いというのも非常に気になっていまして、そういった意味で今谷藤委員おっしゃったように、待遇に対する不満というのは結構大きいのかなと感じました。

**○吉野英岐部会長** 上がらない前提で考えているのではないですかね、ここは。  
はい、ティー委員、どうぞ。

**○ティー・キャンヘーン委員** また全然話変わるのですけれども、1 ページ目に書いている、先ほど 70 歳以上の人に聞いてどうするかという話があって、よく考えて見ると、60 歳以上の無職は六百何人しかいないので、70 歳以上の半分以上が働いているのです。ということは、やはり働いていて、やりがいがないという意味があるのです、多分。全体的に 60 歳無職がすごく多くて、だったら 70 歳以上でやりがいがないというのはしようがないと思うのですけれども、そうではなくて意外と 70 歳以上でも働いているという、ちょっと働いているという前提で想定して話をしているのですけれども、となるとやりがいは落ちているということがあるのですよね。

**○吉野英岐部会長** 何で落ちるの。

**○ティー・キャンヘーン委員** 何で落ちる。働き口が減ったとか、時間が減ったとかということですかね。

**○吉野英岐部会長** もっと働きたいのにとか。

**○ティー・キャンヘーン委員** そこは推測の域を出ないのですけれども、そうなりませんか。  
以上、コメントです。

**○吉野英岐部会長** 若い人ほど落ち込んではいないけれども、減ってはいるから減っていると。0.28 だから。高齢者の人たちの仕事のやりがいが落ち込んでいる可能性がある。

**○ティー・キャンヘーン委員** この分野に関しては、資料 5—2 を見ると一番高いのです。ひっくり返しになりますけれども。

**○吉野英岐部会長** 高いというのは。

**○ティー・キャンヘーン委員** 70 歳以上で仕事にやりがいを感じるが 3.72 で一番高いのです。

○吉野英岐部会長 もともと高い人たち。

○ティー・キャンヘーン委員 70歳以上が一番高くて。

○吉野英岐部会長 70歳以上の人がないので、実感的にどうして高いのかというのはちょっと分かりにくいのですけれども、高いですね。

○ティー・キャンヘーン委員 そうなのです。

○吉野英岐部会長 でも、そこが落ちている。落ちても高い。

○谷藤邦基委員 落ちているけれども、高めではあります。

○ティー・キャンヘーン委員 そうですね。

○吉野英岐部会長 金ではないのだという話ですかね。

○ティー・キャンヘーン委員 どうなのですかね。

○吉野英岐部会長 仕事をする事自体が楽しい、生きがいみたいなことになるので、やりがいにつながるというか。ちょっと現役世代とは違うのかもしれないし。  
はい、どうぞ。

○和川央委員 今、前回の資料6-2の「仕事のやりがい」の年齢別のものを見ているのですが、70歳以上のところを見ると、感じる、やや感じるの方は比較的工作をしていることをうかがわせる回答なのですけれども、あまり感じない、感じないの人が一番高いのは、「以前仕事をしていた」や「今は仕事をしていない」が断トツに高くて、2番目が専業主婦ということなので、「仕事のやりがい」の低い人は現在仕事をしていない人であるといった意味では全くターゲットが違う可能性が高いというのはそのとおりかなと思います。

○吉野英岐部会長 むしろ若年層のところ。

○和川央委員 はい、そうですね。

○吉野英岐部会長 対策も違うということですかね、そうなると。政策、待遇も違うと。

○和川央委員 以前仕事をしていたが、今は仕事をしていないというのをどう解釈をするのかで、そもそももうターゲットではないとするのか、働きたいけれども、働けないというのを何か考慮するかというところの解釈の差は出てくるかなと思います。

○吉野英岐部会長 定年延長というトレンド、流れを考えると、それは働きたいという人が多いからどんどん働いてもらうというのですか、それとも人手が足りないから辞めてもらっては困るみたいな、どっちなのですか。どっちですか。

○谷藤邦基委員 どっちでもなくて、これは国の年金の都合だと思う。

○吉野英岐部会長 年金払いたくない。

○谷藤邦基委員 雇用形態によりますけれども、一定の条件を満たせば厚生年金の方掛けられますので、65歳過ぎても年金は掛けられるのです。

○吉野英岐部会長 お金を払う側、賭け金払う側。

○谷藤邦基委員 70歳過ぎると違ったかな。70歳過ぎると、もう関係なくなったかな。

○吉野英岐部会長 もらうだけ。

○谷藤邦基委員 仕事していても関係なくなったかもしれません。私はまだその年まで行かないので。

○吉野英岐部会長 つまり働いていることによって、年金を掛けてくれるという。

○谷藤邦基委員 いずれたしか70歳までは、厚生年金に入り続けていれば保険料は負担し続けることになるし、労使折半ですけれども、その上で47万円を境として、年金のカットが入る可能性がありますけれども、年金も普通にもらうことができますので。だから、収入が不安定になってくるのを避けるためには働き続けるという、働く側の事情はもちろんあると思いますが、一方で国の方でも年金財政の問題ありますから、保険料いくらかでも掛けてくれる人が多くいた方がいいわけで、だからその辺、いろんな思惑が重なった結果としてなっているのだと思います。

これは会社によると思うのですが、高齢者を本当に好んで雇用したいかという、それはケース・バイ・ケースで、どちらかというと一定年齢過ぎると給料は引き下げることが普通に行われるので、割と安い労働力でベテランを使えるというケースも出てきますけれども、そうはいってもやっぱりそういったパフォーマンス落ちるよねということがあるので、そこは会社の事情によってはいろいろなのだと思います。熟練の技が生きる業種と、そうでないところとありますので。特にIT系になると、熟練の技はほとんど生きないですから。

○吉野英岐部会長 要らない。

○**谷藤邦基委員** むしろ若い人の方が新しいこと知っていて、今の仕事に対応できるというのは何ほでも出てきますので、だからその辺は会社次第なのだと思います。

○**吉野英岐部会長** 難しいですね、ちょっと。

今の話ちょっとまとめますと、仕事のやりがいは現在の収入、給料の額との関連性が一定程度認められるという一方で、先ほどもお話あったとおり、今ついている自分のポジションですね、それが非正規、正規と言ってもいいけれども、そこによって少し違いが出ていのではないかと。勤労属性という今言葉を使っていますけれども、それによってもやっぱりやりがい、感じ方が違うのではないかと。これは、だからでは正社員増やせという話にすぐにはならないかもしれませんが、やりがいを感じることは、給料以外の処遇等々で、これが多分即応的に確保できることによって、やりがいというのはある一定程度高められるのではないかとということぐらいかな。何も分からないと書いてしまうと、ちょっとこれもつらいので、特徴的な要因は抽出できないとばかりも書けないので、そこは少しある一定確度の高い情報については盛り込んでいこうということで、両方書いてもらおうと。

竹村先生、この仕事のやりがいについては何か御意見ありますか。

○**竹村祥子委員** 大丈夫ですか、聞こえますか。

○**吉野英岐部会長** 聞こえます。

○**竹村祥子委員** 就業形態の正規、非正規という件については、コロナが原因であるかどうかは分からないけれども、コロナによってこの問題が顕在化したというような書きの方がいいかと思います。岩手県の中で、(女性の就労問題も、と言いたいところなのですが)、非正規の問題は前からあった話だし、仕事のやりがいというところで書くべきかどうかは分からないのですが、この分野別実感の理由別分析のところ、実感低下した人の3位に上がっているところをまずは指摘する必要があると思います。というのは、令和3年版の男女共同参画白書では、コロナの影響として女性、それから非正規というパートのようなスタイルのところ、サービス業に就いている人にかかなり大きな影響を与えているという分析があるので、今回の県のデータからは見えないかもしれないのだけれども、無関係ではないということは意識した書き方がいいと思います。

この後、収入、所得のところも同様の発想でお願いしたいと思いました。

以上です。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。

ということなのですが

ティー先生、どうぞ。

○**ティー・キャンヘーン委員** 今の竹村委員の話にちょっと関連するのですが、コロナという文言を入れるか入れないかは、ここの分析は読めないで、例えば資料2—④—3を

H31 と R 2 と R 3 と同じようなものを出してもらって、傾向がなければ、多分もしかして、私的には何でもかんでも、確かにコロナの影響はあるかもしれないですけども、これははっきりと言えないですね、書いてしまうと大丈夫なのかなということが心配になりました。すみません。

**○吉野英岐部会長** 国がそう言っているというぐらいにしておくか。

**○ティー・キャンヘーン委員** ちょっと

**○吉野英岐部会長** コロナの分析については、追加分析とかでももう一回やれますので、そこで確かなことを書いていくという手もあります。ただ、竹村先生おっしゃるとおり、国側の分析としてもコロナを無視するわけにはいかないと、あるいはコロナによって引き起こされたであろう様々な減少も、やっぱりある程度までは書き込まれていますということのうち、どの県としてどこまでそれを入れるかどうかですね。

コロナの分析を入れるかどうかも含めて、ちょっとそれは宿題にさせてください。というのも、そろそろ 12 時が近づいてまいりまして、休憩どころではなくなってしまったのです。トイレ休憩すると、もう再開できなくなるので、一応段取りだけちょっと決めておきたいと思います。

今日は、さすがに 3 時間ぐらいやっていますので、本来であれば資料をもう一つ、収入、所得もやり終えて、実感が上昇している分野は、ちょっともう時間がないからやめたとしても、コロナの分析についての御意見もいただく予定であったのですよね。だったのですけれども、なかなか、いろいろ議論が出ましたので、ちょっとそこは今日は難しいかなと思っています。

そうすると、次回は 7 月 27 日を予定しているわけですが、事務局としては約 1 か月後になってしまうので、そこ 1 か月以上空いて大丈夫かどうか、ちょっと私今心配しているのですけれども、事務局サイドとしてはその前にもう一回入れてほしいということはありませんか、会議を。委員の都合がよければ入れることは事務局サイドは可能かどうかということです。どうしましょう。

**○池田政策企画課特命課長** 正直申し上げると、なかなか厳しいというのは正直なところとしてはあるのですが、恐らく次からは公開になってしまう。

**○吉野英岐部会長** 7 月 27 日ね。

**○池田政策企画課特命課長** その前、多分県民意識調査の結果が公表されてしまうので、多分

**○吉野英岐部会長** それはいつですか。

**○千葉調査統計課主任主査** 6 月末。



○吉野英岐部会長 6月末。

○千葉調査統計課主任主査 はい。

○吉野英岐部会長 今日ではないですか。今日とは言わないけれども、一週間ぐらい。  
でも

○池田政策企画課特命課長 場合によっては、収入、所得のところまでやっていただいて、あと3と4については御覧いただいて、御意見を個別に頂戴したものを取りまとめて次の7月のところに臨むという形も

○吉野英岐部会長 ありかな。  
収入、所得

○ティー・キャンヘーン委員 やる。

○吉野英岐部会長 やるかどうか。やりますか。すみません。こちらの段取りが悪くて。  
収入、所得までやっておけば、一区切りをつけるというのが事務局の案。追加で会議開かなくても何とかなるという。

○池田政策企画課特命課長 何とかなると言っていいかは、ちょっといろいろあるところですが、特にコロナの分析のところは、基本的に昨年踏襲しているやり方なので、ある程度御覧いただければいいかなと思うのですが、資料4はちょっと全く新しいところもちょっとあったりして

○吉野英岐部会長 ただ、今日の宿題もあるのですよね。今日新たに委員の皆さんから出していただいたものが出てこない、今までやってきたところもこうだとまでは言い切れないところがあって、そこを考えるといきなり7月27日で公開でずばっといくというので大丈夫でしょうかという。こちら、私のちょっと心配のところ。事務局サイドとしては、もう一回会議を増やせるかどうか、間に。あるいは、調査統計課がどのぐらいまで時間があれば今日出た追加オーダーについて対応可能ということになるかどうかかなのですよね。

○池田政策企画課特命課長 いずれちょっとそこは即答するのが難しいような気がする  
ので、ちょっと調整をさせていただきます

○吉野英岐部会長 はい、分かりました。

委員の皆さんには、一応聞きたいことですが、7月27日の前にもし御都合が合えば、もう一回分析の続きをした上で、7月27日の公開に持っていくということで、それでもいいよという御意見はありますか。都合次第だけれども。

○**谷藤邦基委員** 私は時間の自由度が大分増えましたから。私は大丈夫です。

○**吉野英岐部会長** ティー先生は。

○**ティー・キャンヘーン委員** 個人的には、結構この議論は大事だと思っているので、皆さんの意見を聞いて、自分も結構意見を修正したりとかいうのもあるので、私はやった方がいいと思います。

○**吉野英岐部会長** 和川委員は。

○**和川央委員** 私も3と4に対しては結構意見が出るかなとも思っていて、やった方がいいかなと思っております。

○**吉野英岐部会長** 山田委員は。

○**山田佳奈委員** 日程によってしまうといたしますか。でも、可能であれば皆さんで意見を出し合った方がよろしいかと思えます。

○**吉野英岐部会長** 竹村先生は、7月27日の公開の前にもう一回こういった意見交換をする場があった方がいいかどうかはいかがでしょうか。

○**竹村祥子委員** 時間が合えばやった方がいいと思えますし、時間が合えば、ズームかもしれませんが、出席します。

○**吉野英岐部会長** 分かりました。ありがとうございます。

さて、県側はどうでしょうか。今すぐかどうかはちょっと結論出しにくいかもしれませんが。

○**池田政策企画課特命課長** いずれ開催する方向で、まずは調整をしたいと思えます。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。

本当は終わらさなければいけなかったのですが、すみません、ちょっと終わり切れなくて。やっぱりデータ増えている分だけ時間かかるのですが、もし開いていたのであれば、もう一回きっちり

○**竹澤政策企画課総括課長** 申し訳ありません、本当に協議して、開催する方向で調整させていただきます。

○**吉野英岐部会長** ありがとうございます。すみません。委員の皆様、御負担かけますけ

れども、どんどんデータ数が増えているので、それはやっぱり回数も増えていくのだと個人的には思っていますけれども、またちょっと調査統計課には追加のオーダーが入ってしまって申し訳ないのですけれども、やっぱりきちんとしたレポートを書くためには必要な情報があった方がいいと思いますので、御負担かけますが、よろしくお願いいたします。

ですので、7月27日の前にというぐらいで、ちょっと時間調整はまた事務局の方で、県庁との都合もあると思いますので、併せて次回もう一回臨時的に入れて、27日であと公開ということで、27日は動かさないような形で行きたいと思います。

27日の後は、次いつでしたか。

○池田政策企画課特命課長 10月です。

○吉野英岐部会長 もうないのですよね、だから。

やっぱりちょっともう一回だけ。あといろんなお金もかかってしまうけれども、しょうがないです。すみません。やりがいですから、皆さん、大丈夫ですよ。よろしくお願いいたします。

ということで、ちょうど12時なので、一旦今日のところは、また1個残して、あと大きく後ろのコロナを残しましたけれども、時間どおりに終わりたいと思います。

評価課長さん、よろしいですか。

○高橋政策企画課評価課長 はい。

○吉野英岐部会長 では、もう事務局に戻します。

○高橋政策企画課評価課長 熱心な御議論いただきまして、本当にありがとうございます。

## (2) その他

○高橋政策企画課評価課長 そうしましたら、先ほどのとおり、次回につきましては開催する方向で検討するというので、別途調整させていただきたいと思っております。

## 3 閉会

○高橋政策企画課評価課長 それでは、以上をもちまして本日の部会を終了いたします。長時間にわたりありがとうございました。